

大野一貫先生評

帶甲通

揃置テサツト云ト悉ク責^{せめこはぜ}鞆ヲ掛仕付テ
平脉^(脈)三四十通ノ間ニ大小マデ揃ヘ立出
ルト云事。カエス^くモ驚入^ゝ吒ナリ右予
ガ本文ニ随テ速着脉數ヲ試タルハ悉ク
鞆ヲバ仕付置テ着セシ也鞆責ヲ戻シ是
ヲ仕付ルノ早着ハ存モヨラザル事云ニ
不及彼是本文各条ノ不都合ナルニテ平
脉三四十^通ノ早着其外所々ノ奇事吒ヲモ
推察シテ必シモ不可惑^レ彼^レ鞆責ヲ戻ス^ゝ
本文緒所ヲ正シ六具物々ノ順ヲ能揃テ
トアル文面ニテ袖。小手ヲモ弛シ置左右

ノ相引モ弛シ置^レノ越ヲ知ベシ但シ世
俗ノ六具ト云ニハ袖ハ外器トスレド本
文六具物々トアレハ袖ヲモ此順ニ筭へ
入ル者也可考

早着を用ひてかけ向ふにはすね当の然をかけ返しに
結ふに及はす頬をかけす隨身の小道具も専用な
らぬ物をは持に不及立出まし

一貫曰本文聞ヘタリ時トシテハ左モ可
有事ナラン但シ本文前章ニ早着ハ平脉
三四十通ニテ六具大小ヲ揃立出ル^レト云
ニ此所ニ頬カケズ隨身ノ小道具モ專

用ナラズヲバ持ニ不及ト有^レ難心得文
面前後不都合ナリ三四十通ノ脉數ト云
モノハ至テ早キ^レニテ間取モノニ非ズ
サレハ此事ナルモノトセバ此上モナキ
神速ナル着用ト云ベシ然ニ爰ニ早着ニ
少畧セシハ又彼脉數ノ上ノ早着ナルヤ
同シ早着ニ是等差別アルニテ彼平脉三
四十通ノ事ヲモ推量スベシ。サラバ此所
ノ早着ニ脉ヲ取テ是ヲカゾエ云ンニハ
平脉五通ト云ヘキヤ十通ト云ベキヤ實
ニ笑ニ絶タル^レナリ

夜中なれはさし物はさしぬもよし然れとも夜中でも
用るや否やをかねて伺置へし是武切也

一貫曰本文可ナリ但シ夜戦ニハ指物サ
ハサル事本義ト見ヘタリ或ハ又其家々
ノ軍法又臨時其主スル人ノ制度ニシテ
定ルベカラズ又其人ノ器量ニアルヤ既
ニ武邊咄聞書天正三年五月廿一日長篠
御合戦ノ時トアル条下ニ古人ノ曰夜討
ニハ指物不指法故天野惣次郎指物ナシ
右鷗ノ巢山ニテハ廿一夜ニテ月ハサヘ
申放火ニテ昼ヨリ明リニ候惣次郎一番

二鑓^や致候得ドモ指物ナク後軍ヨリ不見
候戸田半平銀ノサレ頭^{コフベ}ノ指物サス故二
番鑓ナレドモ一番鑓ト見ユル天野ハ夜
ハイヤ路遠シ軍明日ニ持越タル為也ト
テ指物サシタルト也心得有ル事也トゾ
ト記アリ。サレバ是等ノ赴ヲ熟味シテ其
節タル所ヲ思惟スベシ専ラ考ヘノ有ベ
キ事ナラン

甚急なれは右の相引の小はせはかりかけて左を
略し上帯をしめて妻手の高紐をはかけす立出

て扱ひまあらは全備するも時の権也これとも
か程のいそかしき着用は有ましき事也

一貫曰此条聞ヘタリ古ヘトテモ火急ノ
時ハ如此既ニ参考太平記細川清氏討死
ノ条ニ寄手ノ旗ノ手ヲ見ルト均ク二ノ
城戸ヲ開カセ小具足ヲダニモ堅メズ裕
ノ小袖引タヲリテ鎧計ヲ取テ肩ニ抛懸なげうち
テ馬上ニテ上帶シメテ只一騎懸出給ヘ
バ相從フ兵三十餘騎モ或ハ頗當ヲシテ
イマダ抛(着)ヲモ著ズ或ハ箆手ヲ差テイマ
ダ鎧ヲ著(着)ズ真前裏連タル敵千騎ガ中ヘ

破テ入ト見ヘタリ甚急ナル時一三ニ出
ントナラバ誰ニテモ如是ナラン乍去此
人々モ彼平脉三四十通ノ大先生ナラバ
カヽル行跡ハ有間敷ニ不知コソ是非ナ
ケレ信正前章ニ平脉三四十通ニテ六具
大小揃立出ルト云シハ予ガ如キ者ノ一
向難成程ナル早着ニテ即前章ニ評スル
ガ如シ三四十通ノ脉數ト云モノハ早キ
事云ニオヨバズ然ニ此所ニ甚急ナレバ
トアレバ彼平脉ノ早着ヨリハ又極段ノ
早着ト見ユ是ニ脉數ヲ取テハナカリシ

欵何様首尾紛雜シテ予ガ如キ頑愚ノ者
ハ合點參ラズ又信正右ノ相引ノ小ハゼ
バカリカケ左ヲ畧シト云ケレド予ガ着
用ハ最初ヨリ左ノ相引ノ責韃ハ掛置右
ノ韃計弛ス故ニ左ノ韃ノ一ハ貪着ナシ
信正是程ニ速着ノ事ニ泥ミテ少ノ遲速
ヲモ調ル様ナルニ弛^スニ不及左ノ相引ヲ
弛ストハ彼早着ノ修行トヤラン云中ニ
モ心付ザリシニヤ又カ程ノイソカジキ
着用有^ハマジキ^一也トハ信正戦場ニテ不
意ノ急變出來タル時ヲ知タルヤ否ヤ信

正モ太平ノ人ナレバ決テ知間敷事ナリ
縦^{たと}ヒ知タル事トテモ難^じ計事ニテイツモ
初テナルベシサレバコソ参考太平記清
氏ノ行跡^へアリシナリ是程ノ甚急ヨリ上
ハ無モノト云フハ足ガタシ是等ニテモ
平脉三四十通ノ早着ノ事ヲ可察何様予
ガ如キ者ハ急俄ノ時ハ此条ノ早着ヲ可
用皆具全備スル程宜キ事ハナケレト左
様ニ二ツニヨキフハナキ者ナレバ是非
キ事也可考ク

すへは六具着用の習は折々着は試みれは着料の

心をも知べし又六具の破損をも心付へしいにしへ乱世

の士は稽古に及すして手煉す当時の士は此帶甲

の事に心を用て煉磨せすんは帶甲の道に自得あ

るへからず治國に乱を忘れすと云の一録路を考に知へし

一貫曰前章ニモ評スル通り甲冑ヲ着ル

ガ如キ事ニ修行煉磨ナドノ入ト云フ予

ハ合点参ラザルナリ但シ己ガ着料ナド

ハ着用シ試ムベキフハ左モ有ナン折々

着用シ煉磨スルト云又卷^ヒニ試^前覚テ自得

ナクテハ帶甲ノ受用ニ慥ナラズ百練ヲ

重ヌルニシカント云ルフハ難心得元來

甲冑ヲ着ル事ニ修行練磨セザレバ着シ
ガタキ程。六箇敷事ニハ非ズ信正ガ云様
ナランニハ此事ノ上手。下手ヲ論ジテ後
ニハ諸藩ノ家中ニ帶甲ノ師範何流抔ト
号シテ諸人集會シテ此事ノ修行ニ及バ
ズンバ不可成ト云ヘル様ニナラントヤ
云ハマジ是等埒らちモナキナリ又イニシ
ヘ乱世ノ士ハ稽古ニ及ズシテ手練ス抔
トハイカゞ古ヘ戦國ノ武士トテモ左様
ニ甲冑ヲ着事而已アリテ手練スルト云
程ノキハ無ナリ信正此所ニテハ丁寧ナ

ル人ト見ヘテ軍記等ヲ見テモ其文章ト
云フヲ不悟一天下ノ武士乱國ニテハ一
生夜ノ目モ不合モノニテ實ニ閨中迄ニ
歎今太平ノ化ニ安卧シテ軍記等ヲ讀テ
ミル時ハ軍ニ始テ軍ニ終ル事バカリ書
テ少モ安静ノ常躰ヲ不書何ノ代。何ノ時。
ノ逆乱一通迄書編シタルヲ第一ナレバ
古昔ハ軍事ノ外遊藝(遊)ナドノ類ハ少モ不
行様ニ見ル者也是少兒ノ屏風ニ画ケル
七賢人ヲ見テ七賢ト云者ハ飯モ不食一

生簾中ニ居レル者ゾト思フニ等シタト
ヒ戰國ノ武士トラモ甲冑ヲ着ルヲ計シ
テ是ヲ手煉センヤ其國其人ニシテ其時
節アラバ度く着用スルヲハ勿論ナレド
稽古ニ及ズシテ手煉スト云フハ不當説
ナルベシ好事ト云ベシく又信正着料ノ
心ヲモ知リトハ如何信正ガ甲冑ハ生類
ナルヤ此着料ノ心ヲモト書シ心ノ字ニ
目ヲ附テ信正ガ此書ノ始終ヲ考ヘ理學
ヲ談シテ強テ好事ナル赴ノ證據ヲ知ベ
シ書様何程モ有ベキニ甲冑ノ心ナド云

フハ何ト云フゾク

兜前立物并龍頭鍬形

いにしへ冑の前に龍頭鍬形を打或は天衝抱角等を立しは兜の飾にして勇威をしめしたるなり當時將軍家摩下の御相印輪ぬけの前立を用らるゝ故當時の大名心に任て龍頭鍬形を用ゐらすこれに准て諸家の前立物も家中一等の注シルシを立る事通例也

一貫曰如本文古へ龍頭鍬形鹿角ナド兜

ニ立シ跡。諸軍記ニ見ヘタリ先ッ其一證ヲ

云ニ参考平治物語ニ惡右衛門督白星ノ

兜ニ鍬形打タル。左馬頭義朝鍬形打タル

五枚兜。越後中將成親龍頭ノ兜。惡源太義
平高角ノ兜。左衛門佐重盛龍頭ノ兜ノ由
見ヘタリ又天衝ト云物近世ノ書ニハ見
ヘタレド_下古軍記。古物語等ニ予ハ短学ニ
テ見所ナシ又抱角ト云ハ高角ノ一種ニ
テ高角ト云ハ鹿ノ角ナリト徐林氏ハ云
シ即チ武辺咄聞書ニ真田左衛門佐。原隼
人佐ニ對面シテ御和談モ一旦ノヲ終ニ
ハ又御弓箭モ可罷成ト存候得バ我父子
モ一兩年ノ内ニ討死トコソ思ヒ定テ臨
終ノ晴ニアレ御覽候得床ニ飾リ置タル

鹿ノ抱角打タル胄ハ真田先祖代々ノ家
ノ宝ナルヲ亡父昌幸此信賀ニクレ申候
ヘバ是ヲ着テ討死仕候ント記アリ信正
右ノ類ヲバ何ニ據テ書シニヤ例ノ無證
據ニテ凡例ノ赴ニ違ヘリ又信正ノ如言
立物ハ元來勇威ノ相ヲ顯スベキ爲ナリ
且又軍ヲ分ツベキ驗トス即参考太平記
ニ桃井ガ扇一揆ノ中。秋山新藏人光政鋤
形ノ間ニ紅ノ扇ノ月日出シタル殘サズ
開テト見ヘシ又將軍ノ花一揆梅花一枝
折テ兜ノ真向ニサシタレバナド是ナリ

是ハ兼テ設置タル立物ニハアラザレ
氏ト 兎ニ立テ相驗ニ用ヒタルナレバ引レ之

又近キ世相印ニ用シ陰徳太平記二三浦
ガ手ノ者共一樣ニ半月ノ卓物シタル頭
鍬ヲ着テ弓杖ニ縫リテ居タリケルト見
ヘタリ其近外世大祿ノ将名譽ノ士ノ立物
見ヘシ纔わずかニ是ヲアグルニ武辺咄聞書。北
越軍記ニ秀吉ノ八月ケノ兎ハ後立物也黒
田長政隠モナキ例ノ水牛ノ甲ナリ水牛
ノ角本ヲフスベ皮ニテ結付タリ福嶋正
則ノ四段鹿ノ角。細川三齋ノ山鳥。伊達政
宗ノ三月ケノ立物。直江山城守ガ馬藺ノ甲。

後藤又兵衛政次ガ頭形ノ甲ニ孔萑ノ引廻シ五尺宛出シタル銀ノ天衝ノ割立物。日根織部ガ唐冠ノ立物鐘旭ノ耳貳尺五寸服立也。河瀬平左衛門ガ天衝ノ冑。徳永左衛門ガ三本菖蒲ノ甲。岡野左内ガ角榮螺ノ冑。ニソボロノ立物ナド見ヘシ何レモ餘勢ナル物ナルベシ其外近世ノ軍記ニ見ヘシ所。是ヲアグルニ違アラズ如此古今異義アレド其用ハ同ジサレバ其家々ノ軍法ニ因テ一隊一軍ノ合印トシ或ハ其定制ノ餘ニハ異相ノ立物ヲモ以テ

勇威ヲ示スノ類品其家々ノ軍制ニシテ
一定ノ事ニハ非ズ可考又本文當時ト云
ヨリ以下恐アルニ依テ愚評ニ不及但シ
本文此所ノ文面不分明ニテ難心得ケレ
氏既ニ太平記ノ昔シヨリ見ヘシ事ナレ

バ近代新ニ出來タル義ニハ非ズ可考

野史に笠しるし袖印肩印の名出たり其印付たる
所々をさしてかくいゑるもあり又いつ々にしるしを付ても通
して笠注と書し処もあり時勢の詞也泥むへからず
盛衰記に弦袋は兵衛府の笠しるし也とも在但し当時の
詞にて其印を付たる所々をさして袖にあらは袖印肩

にあらは肩印と呼て可然事也

一貫曰本文野史ニ笠シルシ袖印。肩印ノ
名出タリトアレド又例ノ無證據ニテ野
史ニト迄ニテハ正シカラズ悉ク其出所
ヲ書度者ナリ但シ此物古ク見ヘタリ軍
器考補註ニ曰日本紀ニ赤色ヲ以テ衣ノ
上ニ着シト云ハ袖シルシノ始ト云フベ
キガ如クナレドモ身ニシルシヲ付ル亘
ノ始ナレバ。カサシルシノ始ト云ヘルナ
リ是ハ胄ノシルシ。袖ノシルシ。腰小バタ
ノ類スベテ身ニ付ル。シルシノ始トスベ

シ又笠標ハ古ハ胄ニノミ付シナルベシ
頭上ノシルシナルガ故ニ笠シルシトハ
云シナルベシ其後袖ニモシルシ付クル
夏ニナリシニモ猶其名ヲ隠ズシテ袖ノ
笠シルシト云ヒナラハセシナルベシ一
條兼良公ノ寐^(寢)覚ノ記ニ衣裳ハ富貴ノ第
一ノ笠シルシ也ト云夏見タリスベテ目
シルシヲバ俗語ニ笠シルシト云シナル
ベシ其元ハ胄ノ笠標ヨリト^{出タリ}記サレタリ
此説ノ如クニヤ盛衰記長谷部長兵衛尉
信貫六波羅ヘヒカル、時百官悉ク朝ニ

雖奉召仕衛府ノ官ハ淺位ナレバ地下ニ
シテ致奉公直人ニ紛ベキニ依テ内侍所
ノ御貌ヲ學テ絃袋ヲ賜テ左右ノ兵衛尉
赤皮左右ノ衛門尉藍皮是ヲ以テ侍ノ品
ヲ知國王ノ御寶ナレバ可遁非分ノ難笠
注ナレトアリ彼ノ寐覺記ノ赴並ベ考ベ
シ又笠印ハ兜ニ附ヲ本トシテ袖ニ付タ
ルモ其名ハ笠印ト呼ビ鎌倉殿ノ頃ハ專
ラ袖ニ付ル事行レタルヤ東鑑曰文治五
年七月八日下河邊庄司行平依仰調猷御
胄今日持參之開櫬蓋置御前相副紺地錦

御甲直垂上下御覽之處胄後付笠印仰曰
此簡付袖爲尋常之儀歟如何者行平申曰
是曩祖秀卿朝臣佳例也其上兵本意先登
也進先登時以名謁知其仁吾家自後見此
簡可必其先登之由也但可令付袖驗否可
仕御意調進如此物之時用家樣者故實云
干時蒙御感云又盛衰記法皇天台山ヨ
リ還御ノ条ニ義仲ハ赤地ノ錦ノ直垂ニ
塗ゴメノ矢負テマキ劔タチヲハケリ折烏帽
子ニ黒革威ノ鎧ヲ着シ笠驗ヲサウノワ
デニゾ付タリケル又重衡卿生捕ノ条ニ

守長ハ我馬召レナバ我イカベセント思
フテ主ヲ打ステ奉射向ノ袖ノ赤印カナ
グリステ、西ヲサシテ落行ケリ又参考
太平記十種頭中将京合戦ノ条ニ士卒源
平互ニ交レリ笠驗ナクテハ同士討モ有
スベシトテ白絹ヲ一尺ヅ、截テ風ト云
文字ヲ書テ鎧ノ袖ニゾ附サセラレケル
筑紫合戦ノ条ニ入道是ヲ見テ畧一首ノ
歌ヲ袖ノ笠驗ニ書テ故卿ヘソ送ケル神
南合戦ノ条ニ赤松肥前権守朝範ハ此陣
ヲ一番ニ破ヲレヌル事見獨ノ耻ト思ヒ

ケレバ袖ニ著タル笠驗ヲ引隠シテ敵ノ

中へ交リテナソ見ヘシ此袖ノ笠驗或ハ袖ニ著タル笠驗

杯有ニテ袖ニ付タルヲ 彼はヲ並べ考べ
モ笠印ト云シヲ可知

シ又本文肩印ノ名野史ニ出タリトアレ

ト例ノ無證ニテ不知予ハ短学ニテイマ

タ見所ナシ乍去三楠實録ニ辺栗ノ城攻

ノ時楠氏諸軍ニ下知スルノ条ニ相シル

シハ。ワダガミニ赤布八寸ニ切テツケタ

リトアレバ是等肩印ナド呼ベキ歟元來

此物ハ軍分別スベキ相幟ナレバ其家々

ノ製作ニ因リ其将ノ心得有事ニテ大小

長短染色等一定ノ事ナシ則參考太平記
尊氏著篠村条ニ久下ノ者共ガ笠驗ニ一
番ト云字ヲ書タルハ元來ノ家ノ紋力又
是ヘ一番ニ参タリト云。シルシカ又六波
羅合戰ノ条ニ河野七郎通遠笠驗ニ傍折
敷ニ三文字ヲ書テ着タリ義貞除目ノ条
ニ其時降人一萬餘騎皆元ノ笠驗ノ紋ヲ
書直シテ。ツケタリケルガ墨ノ濃薄キ程
見ヘテ顯ニシルカリケルニヤ其次ノ日
五條ノ辻ニ高札ヲ立テ一首ノ歌ヲゾ書
タリケル。二筋ノ中ノ白ミヲ塗隠シニタ

くシゲナ笠驗カナ。又山門牒送南都条ニ

士卒ノ志ヲ勇シメンガ為ニ忝かたじけなくモ十善ノ

天子紅ノ御袴ヲ。又ガセ給ヒ三寸ツ、切

テ所望ノ兵ドモニゾ下サレケル義貞京

金勝院本ニ云義貞最期ノ合戦ナリト見

ヘテ討死セントシケル處ニ思賜ノ御衣

ヲ笠驗ニ附タリケル兵八百餘騎八條河

原ノ敵三萬餘騎ヲ懸散シテトアリコレ

彼下サル、所ノ御袴ヲ 又嶋津四郎ガ濃

笠印ニ付シナルベシ 紅ノ大笠驗。畑六郎左衛門ガ一ツ引兩ニ

紅ノ大笠驗。土岐惡五郎ガ水色ノ笠

驗。又軍器考ニ體源抄ヲ引テ五丈ノ練貫

州浜すはま

ヲ一尺三寸切テ三ツニワリテ笠シルシ
ニシテトアリ並べ考ベシ又此物絹布ノ
ミ用ルニ非ズ甲冑而已ニ附ルニモ非ズ
平家物語法住寺合戦ノ条義仲ガ軍ノ吉
例ナレバトテ畧御方ノ笠シルシニハ松
ノ葉ヲゾ付タリケル又参考太平記多々
良濱合戦ノ条梅松論云香椎宮ノ御寶前
ヲ過サセ給フ處ニ神人等杉ノ枝ヲ折持
テ申ケルハ敵ハ皆篠ノ葉ヲ笠驗ニ著テ
候。是ハ味方ノ御笠驗ナルベシトテ 氏
直義ヨリ始奉リ軍勢ノ笠驗ニゾ著サセ

ケル又顯家卿討死ノ条難太平記ニ云桃
井勢ハ皆鷹ノ鈴ヲ附タリ故殿笠驗ヲ思
按シ給ヒケルニ。アカ鳥ヲ馬ニ附バヤト
テ其夜俄ニ附ラレキト見ヘタリサレバ
彼是並ベ考ヘ一概ニ思フベカラズ笠印
ノ用ハ軍サヘワカテバスミタルヲナリ
近世ハ指物脊指物腰差物ナリヲ以テ此用行レタ
レバ古代ノ笠驗ハ自ラ廢レテ今ハ歩卒
ナドノ相印トスル家々アリテ其附所モ
一定ナラズ本文ノ通り其印ヲ付タル所
々ヲ。サシテ袖ニアラバ袖印肩ニアラバ

肩印ト呼ベキナリ又古代笠驗ハ亡廢シ
テ今ノ指物ニ成シ事事変ニシテ古代ノ
笠印ニハ勝リタル利用アル故ニアシナ
ヘテ此物ニ成シ者也此所能々思惟シテ
指物ノ用要ヲ達スベシク

兜の後には在環を保元平治の双紙には保呂付の環と
あり東鑑には笠印付の環とあり当時函工の家にては
高勝の環と云按に上古に総角を付る事是を高総
角と呼是は鎧の脊に在総角に對していへる為也

一貫曰本文此鑑ヲ保元平治ノ双紙ニハ

保呂付ノ環トアル由予ハ此双紙末^ダ及見^レ

保元物語。平治物語。或ハ参考保元物語。参考平治物語。杯ヲ見タレ^レ此物語ニハ左様ノ事ハ不見^ニ當参考保元平治物語ハ頗諸記録軍記等ヲモ撰集校正シテ成タル書ナレバ引書数多ナル中ニ一向不見^ル事ナリ又其外ノ軍記ニモ予ハ短学ニテ見所ナシ但シ参考太平記神南合戰ノ条天正本ニ其上右衛門佐ノ内朧两眼ノ間ヲ後ノ纒^{ほろ}附ノ本ヘ矢サキ白クゾ射タリケルトアリ如此後ノ纒^レ附ノ本トアレバ此鑑ニ保呂附シ事モヤ有ツベキ又東鑑

ニハ笠印付ノ鑑トアリトアレド予ハ見
當ラズ東鑑ニハ文治五年七月八日下河
邊庄司行平依仰調献御甲今日持参_畧 胄
後付_ニ笠標_ニトアレバ此鑑ニ笠印ヲ附シ赴
明カナリ角。胄ノ後ニ笠標ヲ付ルト而已
アルヲ笠印ノ鑑トアリトハ信正ガ例ノ
癖ナリ是等ニテハ保元平治ノ双紙ニハ
保呂付ノ鑑トアリト云フモ覺束ナシ疑
フラクハ左様ノ書合點参ラズ又當時函
工ノ家ニテハ高勝ノ鑑トハ云ト有フ予
ハイマタ知ザレ_レ此函工ノ家ニテハト

有_レ得タリトスベシ當時故實者ナド函
工ノ説ト武家ノ説トニ相差別スル事ヲ
不辨シテ以世コレヲ混雜シタル事甚多
シ取分ズンバ有ベカラズ又上古ニ総角
ヲ付ル事。是ヲ高総角ト呼トアル_レモ予
ハ短学ナレバ上古ニ左様ニ呼タル_レ古
軍記等ニ所見アラズ是モ例ノ無證拠ニ
テ凡例ニ矛盾ス但シ此鑑ニ緒紉ヲ附ル
事ハ古代ニモ有ヘルニヤ軍器考補註ニ
云後三年合戰繪ノ中ニ冑ノ後ノ環ニ総
角付タル見タリト記サレタリ又軍器考

圖式ニ頭ル所ノ春日社本談議屋源義經
朝臣鎧註文胄ノ条ニ母衣付鎧金焼付母
衣附緒茜染総角三尺五寸トアリ但シ此
鎧ヲ母
衣付ノ鎧此茜染ノ緒ヲ母衣附ノ緒トモ
総角トモ書シハ此鎧註文撰レシ時其人
ノ了簡ニテ名付又山城州藤杜社藏崇道
書タル者ナラン天皇ノ胄。高勝鎧メツキ石清水社藏源義
家朝臣胄。高勝鎧指渡五分菊坐指渡五分
半。鞍馬寺藏胄古鉢高勝鎧ノ跡アリト記
アリ又備前國上寺佐々木盛綱ノ胄ノ小
形ニモ此鎧アリ彼是ヲ並べ考ルニ何様
此鎧古キ物ナリシ按ニ此物用シ所ハ其

時世ニ依テ不足事ト見ユ右後三年ノ画
又東鑑ニ見ヘシ所。或ハ軍器考ノ圖式ニ
出タル所。参考太平記見ヘシ赴前章ノ通
ナリ可考者也サレバ其用ル所異ナラン
ニハ其名附呼ケンヲモ定ルベカラズ猶
徐林氏ニ授セシ赴自考モ有ケレト爰ニ
ハ漏シヌ又彼笠標ノ鑲ノ下ニ母衣附ノ
鑲トテ朶ニ鑲ヲ二ツ双ベ打タル圖三才
圖會。武用辨畧ナドニ見ヘ節用杯云俗書
ニモ有ケレド一向妄作ニテ信ルニ不足
古軍記。古物語。古画ドモニ不見事ナリ殊

二三才圖會武用辨畧ノ如キ甚以誤多キ

書ナリ

総角兆^{うらない}たりと云詩經の扱也

一貫曰是ハ詩經ニ婉兮變兮總角兆兮末

幾見兮突而弁兮

此也婉變少好
貌牝兩角貌

ト見ヘタ

リ又軍器考ニ曰ト部家ノ説ニハ冠トイ

フ物ハ三十四代ノ朝廷ノ御時ヨリ始ル

推古ソレヨリサキノ代ハ男ハ髮ヲフタツ

ニワケビンヅラニユウ女ハサカ髮ニワ

ケテ額ニヒトツニユヒテ櫛ヲサシソノ

餘ヲ後ニサシ^ゲ也ビンヅラトハ総角トカ

ク髪ヲ二ツニワカチ結ビシ形ハ角ニ似
タリ其餘ノ垂タルハ總ニ似タレバ也コ
レヲ又アゲマキトイフ也鎧ノ總角ハ神
代ヲマナビ總角^{ビンツラ}ヲ表スル也ト見エケリ
ト記サレシサレバ新井氏ノ如^レ説信正モ
是ニ因順セル者ナラン何様此帶甲通ニ
委細ヲ述ヘザレハ不分明也又此物古代
鎧ニ附シ實用甚多説ニテ異談マチク也
予モ此物ノ名義實用等ニ考ヘアリケレ
凡^レ殊外繁文ニナレバ爰ニ不贅

然るを俗のかな出に揚卷とも勝^{アレ}卷とも書たる高勝^{タカ}卷

の下略を用ひ音に鳴て高勝の鑠と俗称せる物也

前件の出所故實悉續編に詳也

一貫曰信正ノ云通りアゲマキニ總角の
字本據ナキニアラズ即前章ノ通りナリ
俗字ニハサマク書ケルヲ是而已ニ非ズ
鎧師ノ家ニテハ猶ヤスカラヌ文字ヲ遣
フ類少シカラズ揚卷勝卷ノ字ナドヲ假
ニシタル左モアラン歟又高勝卷ノ下畧
ヲ用ヒ音ニ唱テ高勝ノ環ト俗称セルト
云ルヲハ煩シク如何アランカ但シ吾國
ノ古風凡テ事々物々其言ノ葉ノアタレ

ル所ヲシテ名附呼シナルニ漢字ヲ其物
ニ引當或ハ其物ハ異國ノ制ヲ用ヒ名ハ
吾國ノ通用ヲ呼又吾國ノ物ニ西土ノ名
ヲ借テ字義ニアハセ或ハ漢字其物ト合
ズトヲ誤トシ文字ニ相當シテ事物ヲ制
シ或ハ吾國ノ古ハ文字ニ拘ルヲナシト
畧訓轉語五音相通ナド附會セ又古ト近
キ世ト其物ハ同キナルニ其名ヲ異ニシ
テ多名アリ又異ナル國ノ音語混雜シ
テ紛然タルヲ少シカラズサレバ信正ガ

此説有間敷ニアラズ猶知ラン人ニ尋ベ
シ何様事物ノ名ハ其時世ノ通俗ニ随テ
呼ベキヲ可ナラン又前件ノ出所故實悉
讀編ニ詳也トアレバ彼書ヲ一覽シテカ
ヽル事氏ヲモ辨知シタキ者ナレド其書
ヲ得ザレバ是非ナシ

按るにむかし然に鋏形前立物頭立脇立後立の品
々あれ共当時其家風に随ひて造るべし煉革を以
造れは損せずして覺し當時は價の下直なるを專一
とする故檜桐を以て造るもの多し真鍮にて造たらは
か然事也これらの箭にも損益を自得すへし

一貫曰甕ノ立物ニ龍頭鍬形古代ニ見ヘ
シ赴即前章ニ述ル通也元來立物ヲタツ
ルハ前後。左右。中。定レル事ナシトイヘ
前立根本也是正面ナレバ自然ノ理ナリ
ソレヨリ左右。中。後。ハ轉形ナリ是モ其立
ル所ノ品物ニヨリテ或ハ両脇ナラデ難
立アリ頭頂ナラデ不成アリ後ニテ宣キ
アリ古代ヨリ種々様々ナレド近世ノゴ
トク異類異形ヲ逞シウセザレバ多分前
立ナリ但シ軍器考圖式ニ出タル鞍馬寺
義經ノ冑鍬形ノ前立ニ獅子ノ頭立ナリ

同寺古鉢ト云モノ宝珠ノ頭立ナリ又源
平盛衰記ハ嶋合戦ニ義經小林新五宗行
ニ給シ兜ハ源氏重代ニテウ宝也白力子
ニテ。タツヲ前ニ三ウシロニ三サウニ一
ツ、打タレバ。ハリウト名付タリ保元ノ
イクサニ鎮西八郎タメトモノ。キタリケ
ル重代ノ。タカラナレトアリ是等ノ赴
ニテ古代ノ様ヲモ推察スベシ猶近代ノ
軍記等ニ至テハ信長記。豊臣記。北越軍記。
武辺咄聞書。三河後風土
記。杯異形異類ノ立物行レテ殊ニ大立物
ナドモ見ヘタレハ其立ル所モ前立ノミ

多カラズ信正當時其家風ニ随ヒテ造ル
ベシトハ得タリトスベシ又煉革ヲ以造
レバ損セズシテ宜シト云ヨリ以下難心
得煉革ヲ以トハ一概ナル云分ナリ是モ
其立物ノ品ニヨリテハ煉革何程ヨロシ
クテモ作ラレヌ物アリ又檜桐ニテ造ル
モ其品形ニヨリテ難極強チ價ノ下直而
已ニカゝワルニモ有マジ其人ニヨルベ
キニヤ又真鍮可然ヨシ有テモ是モ其品
形ニ依テ定ルベカラズ又コレラノ器ニ
モ損益ヲ自得スベシトアリテモ是モ其

立物ノ品形ニ依テハ損失アリト知ナガラモ何ノ下地ヲ以テ制セザレバ不成物アリ又其得用ヲエランテ制作ナルモアルベシ是其品物ニヨルベシ只く其家風ノ軍制或ハ定制ナキ家風ナラバ其人ノ好所ニ随テ可作^レナレバ一定ノ事アルベカラズ又信正檜桐ヲ以ニ造ルハ下直ナルヲ專一トスル故トイヘド武邊咄聞書ニ細川三齊江戸上下ニ定テ京都吉田ニ家敷有テ数日逗留有其刻烏丸大納言光廣卿へ振舞ニ参ラレ近國ノ大名ヨリ

使者有テ烏丸殿へ三齊ノ跡ヲ追フテ來
ル是ハ胄ヲ一刎三齊ノ物数奇ニテ仕立
度トノ使也三齊注文ヲ書セ被遣ニ立物
水牛ノ角下地ハ桐ノ木ト書付有之使者
申シ候ハ主人念入候。人ニテ候。立物ノ下
地桐木ト御坐候。物ニ當リ折レ候。所承届
申聞セ度ト有。三齊氣色変リケ様ノ大立
物ハ折レ安キガヨシ働ク時。物ニ掛リ外
レ兼候時。折レタルガヨシトノ。アヒサツ
ナリ使者承リ折レ申候テハ後日如何ト
存候ト申ス三齊アザ笑ヒ給ヒ兵ノ戰場

ニ出ルハ生テ帰ラント不思法ナリ立物
折テハ後日如何トノ思案ナラバニトナ
キ命ノ思案ハ如何存ラレ候ヅ働テ立物
折レタラバ猶見^レ可成タトヘ折タリト
後日ニ何ニテモ可立命ガ折タラバ何ト
カセラレンニツナキ命ヲ捨テ働ク上ハ
立物ノ氣遣ハ無用ナリ只輕キヲ本ニシ
テ能力ラント申サレ其坐ニ居タル人後
ニ物語セシナリト記アリ宜ナルカナ此
事可ナルカナ此事今日太平ノ結構安坐
ノ了簡ニテ理屈詰ニシタル事トハ天地

懸隔玉石ノ相違ナリ今當立物好マン者
此御人ノ意氣ヲ可持くカ、ル拔群ノ人
モ有ケレバ右如説云ンモ耻カシキニ非
ズセ細川氏は等ヲ聞給フ事成ナラバ彼
冑ノ注文ヲ頼シ使者ノ如ク呵リ耻シメ
給フラン思惟アルベシク

引廻し腰蓑

此物上代には聞へす中世より起るにや中華の魺紅セウ白櫻エイ
なと云ものを模して造出せるなるへし後編に詳也

一貫曰此物予モ古軍記等ニ所見アラズ

又其起源トスベキ事未知信正中世ヨリ

起ルニヤト云ヘド是モ例ノ無證ニテ不
分明ナリ又異邦ノ事ヲ引タレド予ハ短
学ニテ不知異邦ノ書ニハ何ト云ル書ニ
出タル和書ニアル事ニヤ是モ例ノ無証
據ナリ且ヘ異邦ヲシテ中華ナド尊称ス
ルヲ如何前章函古今ノ制ノ条ニ愚評ス
ルガ如シ可考後編ニ詳也トナレバ其書
ヲ見テアキラメタケレト是ヲ得ザレバ
是非ナシ

引廻しとも腰みの共書なり猪の鹿毛など俗称す
兎の飾也金の繩馬の毛を以て造る平士は不可用

一貫曰此物信正ノ如言引廻トモ腰蓑ト
モ呼也其徐林氏ノ傳ニ調ト云モノハ下
ノ板上ニ覆タル者ナレバ其上ニ毛羽ナ
ドヲ編作是ヲ掛テ雨露ヲシノグナリ即
腰蓑ト名付タルニテモ知ベシ且是ヲ被
リテ勇威ノ相ヲ顯ベキ爲ナリトゾ故ニ
毛羽ノ類ニテ作ル或革糸紙紙ニハ雨ヲ防ク制アリ
ニテモ是ヲ制スト云ヘリ此物掛タル證
據粗コレヲ舉ルニ陰徳太平記肥前國田
傳村合戦ノ条ニ赤熊冑著タル武者三騎
諸勢ノ先ニ立テ出群ノ功ヲナシ敵ヲ討

夏不知員トアリ鍋嶋平右衛門清久其子
左近將監清正同次男孫四郎清房トゾ名
乗ケルト見ヘタリ又碎玉話ニ自身モ鎗
取テ進ム處ニサハヤカニ見ヘタル武者
アリ即チ槿伏股ヲ二刀斬リ冑ニ付タル
ハグマヲ引切テ腰ニ挾メハ一貫云是ハ
木村長門守
重成ヲ庵原助右衛門
討取シ文章ニ見タリ又武辺咄聞書ニ兵
助眼ヲ怒ラシ涙ヲ流シ拙者鎗ノ相手ハ
白紙四手ノ腰蓑シテ鎗ハ十文字冑ハ銀
ノオモタカノ立物ニテ杉本次郎助ト名
乗候畧次郎助曰十文字ノ鎌ニ血付有之

候其者ハ。トツハイノ甲ニ鳥毛カ黒熊ノ
引廻付候テ直鎧ヲ持候ト申候則田中兵
助也ト記セリ可考又武器普録ニハ云死
卷氏曳廻氏云白熊黒熊赤熊鳥尾ノ類ヲ
以テスベシ長ケハ鉢付ノ板ニ應スベシ
大概一尺六七寸ノモノ也ト記セリ徐林
氏ハ此物ヲ俗ニカラノカシラト云物ニ
テ西土ヨリ出ル髦牛尾ナリ則甲陽軍鑑
味方原合戦ノ条ニ神君ノ兵八十ガ七八
迄ハ唐ノ頭ヲ掛タル故ニ信玄ノ士小杉
右近之助ト云者ノ詠ニ家康ニスギタル

物ガニアリ唐ノ頭二本田平八トヨミシ
是ナリト教セリ元。此物定制アルニ非ズ
毛羽糸。革。紙。ナドニテ作ル其人ノ心任ナ
ルベシ或ハ其家ノ軍制ニヨリテ此物ヲ
一列トシテ軍ヲ可分事ハ其将ノ節制ニ
アリ又本文ニ平士ハ不可用トアルヲ信
王何ノ據アリテ書ケルヤ何ノ子細モナ
ク平士ハ不可用ト而已アリテハ不埒ナ
リ信正大將軍ノ身分ニテ己ガ平士ニ是
ヲ禁トスルナラバ尤左モ有事モアリナ
ント云ベキ歟既而凡例ニ是ヲ世ニ公ケ

ニセヨトツゝルニマカセテト書シニ何
ノ故トテモナク平士ハ不可用ト而已有
テハ世ニ公ケニハ成ヌ事也又信正ガ自
己ノ了簡ニテ云シナラバ心得違ヒト
云者也諸家ノ平士何ノ故モナク誰カ信
正ガ命ニ随フ者アランヤ可考

是を付る所に小締あり夫を付る上に四天の鋌なと云有

一貫曰信正此締ハ引廻ヲ付ベキ料ニシ
タル者ナリト思フハ僻ナラン是ハ此料
ニ拵フタル者ニハ非ズ其制作ヲ見テモ
知レラル事也予岩井庄藏ニ對シテ聞シ

ニカレガ家ニテハ壺留ト名付テ鉢裏ニ
テ卷込糊固メニシテ表ヨリ引出シ喰合
セテ留タル者也容易ニ拔出ル者ニハ非
ズ存外ニ丈夫ナルモノト云ヘリ予雨露
ニフレタラン時モ不拔ヤト詰問シニ其
時ノ事ハ覺束ナシト答ヘキ信正ハ制作
ノ事モ委細ニシタル躰ナレバ能合點ノ
上ニテ云シナルベケレド始終ノ文面ニ
テハ疑少シカラズ又是ヲ付ル所ニ小締
アリ夫ヲ付ル上ニ四天ノ鋳ナト云有ト
彼締ノ用ヲバ云タレト其上ニ有ケル四

天ノ鋳ノ用ヲバ云フ不能是信正此締ニ
引廻ヲ付ルト云俗傳ヲ可ナリトシテ上
ノ四天ノ鋳ニハ不心附此鋳ハ何ノ用ニ
ヤ立ケン物ト云フモナク夫ヲ付ル上ニ
四天ノ鋳ナド云有ト書ラルナリ彼締ノ
上ニ四天ノ鋳ト云物有フハ信正ガ案内
セズ凡誰モ能知タルフナリ元來此四天
ノ鋳モ此小締モ上古實用アリテ是ヲ雲
井附ナト云テ故實トスト山孤氏ノ傳タ
リ面授的當ナル故ニ爰不贅又本文前ニ
此物上代ニハ聞ヘズ中世ヨリ起ルニヤ

ト云テ爰ニ此締ハ引廻ヲ付ル料ノ物ト
スルナレバ此小締モ中世ヨリ出來タル
物ナルベケレド此締此鋳尤古ク見ヘタ
リ即チ軍器考圖式藤杜崇道天皇ノ甞ニ
四天ノ鋳メツキ。鞍馬寺古鉢ニ四天ノ鋳
穴玉縁金メツキトアリテ其圖ニハ締ヲ
結出^ヒセリ鉢アリ同義經ノ冑四天穴玉縁
金メツキ紅唐打四所輪出春日社義經ノ
冑四天穴鵠目玉縁刻坐アリ金焼付ト記
セリ如是四天ノ鋳^レ吒穴トモアリテ鞍馬
寺古鉢ナル物ノ圖ニ締ヲ結出シ義經ノ

兜四天ノ穴ニ紅唐打四所輸出トアレバ
此締ヲ引廻ヲ付料トスレバ中世ヨリ起
ルト云説トハ相矛盾ス信正前後ヲモカ
エリミズ言葉ノ出ル儘ニ書タル妄説也
又信玄ノ像ノフ迄引テ證據トスレト難

取下ニテ見ベシ

信玄公諏訪法性の御兜引廻しは八幡座の際より
取付たるもの也と明珍信家か家傳也近世の陰に
四天の鉾の下より常の引廻しのことく圖するは
古を弁せざる也信玄公の像の古画なり夫によ
つみ見かへし

一貫曰信玄ノ像ヲ以テ引廻ノ證據トス
ルヲ如何信正彼引廻ハ小締ニ付ヲ本ナ
リトシテ四天穴ヨリ出ルナ四天ノ鋌ノ
下ヨリ常ノ引廻シノゴトク圖スルハ古
ヲ辨ゼザルナリトスルヲ合點參ラズ信
玄諏訪法性ノ冑ノ引廻ハ八幡坐ノ際ヨ
リ取付タル者也トナラバ信正ガ小締ニ
付ルト云證據ニハナリガタシ彼小締ハ
兜ノ鉢ノ半中ニ作タルモノナレバ八幡
坐ノ際ヨリ引廻ヲ付タル信玄ノ像ハ此
締ニ付ルト云證據ニハ餘リニ上リ過タ

リ予ハ短学ナレド明珎家譜岩井吉右衛門所持明珍

代々作ノ事信家信玄ノ兜ヲ作ルヲ記ス或ハ明珎大隅ヨリ

遠藤保武ニ送タルト云書面諏訪星盛ノ

答シタル書面ナリ又武林原始明珎家系マド見シ

ニ信玄ノ此引廻ノ事曾テ不見又武器普

録口傳誌ニハ諏訪星盛ノ兜ハ明珎家ノ

称ナリ諏訪明神へ籠物大星ノ兜ノ寫イ

ラ星ノ冑ナリト云又當世具足之卷ト云

モノニハ信玄ノ御冑ハ白キ植毛ノ惣髪

ニテ日輪ノ前豎物有之ト記セリ此等ノ

説ニテ見ル時ハ彼八幡坐ノ際ヨリト信

正ノ云ル引廻ノ事ハ如何アラン乍去信
正モ明珍信家ガ家傳トアレバ正説ナル
ベケレド彼是ノ説紛然タル事ナリ何様
引廻ヲ小締ニ付ルト云証拠ニ信正ガ法
性ノ兜ノ引廻ト云物ハ上リ遇タリ又如
右八幡坐ノ際ヨリ取付テモ引廻トモ腰
ミノ氏云名目相當セルニヤ愚按ニ引廻
トハ兜ノ腰ヲ右ヨリカ左ヨリカ何レカ
タクヨリ引廻シテ鍔ヲ覆フ故ニ。ヒキマ
ハシト云又腰蓑トハ兜ノ腰ニ附タルニ
毛羽ナドニテ作タルガ蓑ヲ着タル如ク

ナレバ腰蓑ト云或ハ腰卷^ヒ凡呼是モ兜ノ
腰ヲマク故ナリ然ニ八幡坐ノ際ヨリ取
附或ハ彼小締ヨリ付タラン物ヲ腰蓑引
廻又腰卷ナドノ名目當レルニヤ難心得
兜ノ鉢ト銅ノ鉢付ノ板トノ邊ヲ凡テ腰
ト云檜垣ヲ腰金物トモ呼ヒ銅附ノ板ヲ
腰卷金トモ云類ナリ又信玄ノ古画ト云
モノ八幡坐ノ際ヨリ毛ヲ被リタル有テ
モ慥ニ引廻シトハ定メカタルベシ引
廻ナリト云正キ證據ハ其引廻ノ端ノ紉
ヲ何ゾニ結留タル躰ニテモ見ヘタルカ

又彼毛蓑ヲ編附タル躰カ何ゾ明證ナク
テハ引廻トハ難定モシ是ハ引廻ニハ非
ズ植毛ナリト云者アリタランニハ大声
ノ者勝タルベシ元來繪ナル故是程ノ所
左様ニ正キ事ハ見ユベカラズ画ニテモ
ワカルヲモ有ケレ_レ此像ハ引廻トモ植
毛トモ恐ラクハ不可分又是ヲ引廻ナリ
トセバ八幡坐ノ所ニテイカ、シテ留タ
ル者ゾヤ不審ナルモノナリ予ハ短学ニ
テ引廻ヲ頂ヨリ附ルト云ヲモ小締ニ付
ルト云ヲ不知也猶尋ヌベシ

髷頭巾 鎧頭巾

近世の説に鉢かもを入たる頭巾を髷頭巾とす首頂

頭巾帽子髷半首

面頬にも此名有
髷とは別なり

頼政頭巾長範頭

巾の類是なり又鎧頭巾は冑の上にかふむる大頭
巾也武者ふりを變に用と云説なり信用しかたし
是にの物平士の具にあらず續編にのす

一貫曰此物古軍記等ニ所見ナシ其制作

モ詳ナラズ信正ノ如説鉢鉄ヲ入タル頭

巾アタルベケン坎但シ首頂^頭巾帽子髷半

首。頼政頭巾。長範頭巾。ノ五品此物ナリト

云事予ハ短学ニテ不知事也中ニモ半首

ヲ以テ兜頭巾ノ一種トスルヲ如何アラ
ン下ニテ可見考又本文面頬ニモ此名有
兜トハ別ナリト有一一向文面難心得面
頬ヲ以テ半首ト名付タル一曾テ不知レヲ
ナリ何レノ書何ノ據有テ角ハ云ケルニ
ヤ素ヨリ半首ト面頬トハ異別ノ物ニテ
半首ハハツフリ面頬ハメンホウト云ヨ
リ外二名ハナキ事也参考保元物語ニハ
半頭ト書タリ武器
普録口傳誌ニハ逆頬ト書テハツフリト
讀セタリ又文字ノ儘ニサカツラトモ讀
セテハツフリトス又兜トハ別ナリ
予ハ此外ノヲバ不知レ
トハ何事ゾ信正ガ案内ニハ不及半首ト

面頰ト髡ト同物ナリト思者ハ余モアル
ベカラズ一向評スベキ様モナキ次第也
又参考保元物語義朝白河殿夜討条ニ近
久馳歸兵共馬ニ乗義朝只今半頰ハツフリカケ黒
馬ニ黒鞍置手打カケテ向候トアリ如此
半頰ノ字ニハツフリノ假名ヲ附タレバ
是等ヲ見誤テ信正面頰ニモハツフリノ
名有ト思ヒケルカソレニシタレバトテ参
考保元物語ニ見ヘシハ半頰ナレバ面頰
ニハ非ズ軍器考補註ニ見ルニ半頰ノ字
ニハツブリトカナ付シタルモアリ皆誤

ナリト記サレシ得タリトスベシサレバ
何レニテモ皆誤ナレバ能々可考事ナリ
タ、穩カナル説ヲ可トスベシ又首頂頭
巾ト云ル物ハ伊勢氏曰飛驒守惟久ノ画
シ奥州後三年合戦ノ繪卷物ニ義家朝臣
帰洛ノ行粧ヲ画カキシカ者絹ノ出長頭
巾ヲカブリ白素襖着テヒルマキシタル
柄長ヒサゴ持タル躰見ヘタリト鎌倉年
中行事ノ頭注ニアリ又平家物語土佐^坊キ
ラレノ條ニ土佐坊其日ノ装束ニハ。カチ
ノ直垂ニ黒革威ノ鎧着テ。シユツチヤウ

ヅキンヲゾ着タリケル源平盛衰記新八
マシクハシ書ノ条ニ。カクメイ其日ノシ
ヤウゾクニハ。カチンノヨロヒ、タ、レ
ニ。シユテウヅキン。シテ。フシナハメノヨ
ロイニ。クロツバノソヤ。負フテ又鎌倉年
中行事ニ御力者或十人或八人又ハ六人
何モ出長頭巾トテ黒布ニテク、リテ。ウ
シロノ方ヲバ廣クシテ中一所バカリト
ヂタルヲカブリ。シロキ素袍ニ。ソメタル
小袴引敷ニテ太刀ヲ。ハクトアリ。彼是ヲ
見ルニ此物ハ法師武者ノ着ベキモノナ

リ右後三年卷物ニ有ト云カ者土佐坊昌
俊。大夫坊覺明。何レモ刺髪ノ者ナリ又
鎌倉年中行事頭注ニカ者ハ刺髪ノ者ナ
リ興ヲ兒キ長刀ヲモ持ツ役也口記アリ
又帽子兜半首モ此類トシタルハ信正ガ
例ノ癖ナラン彼帽子兜ハ平家物語ニサ
カ四郎ヤウガク帽子兜ニ五枚兜ヲ着ル
参考太平記ニ圓心ハ時下リタル腹卷ニ
帽子兜ヲ着又熊野人ト見エテ長七尺許
ナルガ半首カケ帽子冑ニ五枚冑ヲ重テ
着ル明德記ニ大内介ガ兵神祇官ノ森ヲ
背ニ當テ射手ノ兵ハ皆同丸ノ腹當。帽子
甲ニテトアリ此物軍器考標疑ニ帽子冑

ト云物ハ今世鎖頭巾ト云物ナルベシ古
今名ヲ異ニシテ其實ハ同シキ物ナルベ
キニヤト記サレタリサレバ首頂頭巾ト
ハ異ナルベシ又半首ハ前章ニ愚評スル
通り也則軍器考圖式ニ顛レタル半首ト
アルニ品鉄ノ打ノベナリ又軍器考標疑
ノ説モカノ圖式ノ額ヨリ左右ノ目尻ニ
至リタルヲ是真ノ半首也ト記サレタリ
又予ガ山孤氏子哲氏徐林氏ヨリ授リシ半
首モ此制ニ相似タリサレバ是ヲ以テ出
長頭巾ノ一類トスルヲ謬ナルベシ但シ

單騎要略ニ見ヘシ半首ト云二品ハ異ナル物ナリソレガ中ニ一品ハ鉄鉢ト云ベキ物ニ両方ノ耳ノ上ハ所ヨリ笠ノ緒ノ如キ紉ヲ附タリ一品ハ一幅ナル布絹トオボシクテ額ニ當ル所黒ク縁ヲ画ケリ今云鎖鉢卷ニ彷彿タリ則其辨ニモ其法マヅ半首ヲ頭上ニイタゞキ左右ニ余リタル幅ヲ頬被ノコトク两旁ヘ引オロシ頤ノ下ニテ左右ヘ引違マタ頭上ヘトリテ治シカ定ト結ビ留ルナリト記セリ信正此單騎要略ヲ信仰スル躰此書中ニ顯然タレ

バ此所ニ首頂頭巾ト半首ト一類トシテ
混シタルハ村井昌弘也單騎
要畧ノ作人ガ半首ト云
ル心得タルナルベシ甚誤レリ又頼政頭
巾長範頭巾ノ二品ハ予ハ諸軍記ニ見所
ナシ頼政ノ事跡ハ参考保元平治物語平
家物語盛衰記杯ニ有ケレ氏頭巾ノヲハ
不見當イカナル物ヤラン又長範頭巾ト
云物ハ徐林氏ハ今俗ニ直平頭巾ト云物
ナルベシ直平ハ出長頭巾ナドノ如キニ
比ベタランニ頂キ直ニ平ナル故ノ事也

ト云ヘリ乍去是等其據ナケレバ信ズル
ニ不足又鎧頭巾ハ胄ノ上ニカムル大頭
巾也ト云フ予ハ短学ニテ是又不知義也
愚按ニ彼兜頭巾ト云ル物モ鎧頭巾モ元
ト同物ニテ。カブト頭巾ト。ヨロヒ頭巾ト
呼タルナラン坎甲ノ字ヲ俗ニカブトノ
事ニモ用タル類甚多ケレバ是等ノフヲ
見誤リテ鎧頭巾ハ兜頭巾トハ差別アル
ベシト無理ニ其制ヲ分作シテ呼ルナル
ベシ又今世俗傳ニ仕寄兜ナド号テ或ハ
藁ヲ以テ作り木綿布ニテ制スルト云類

アリ是等ニヨリテ鎧頭巾ナド云物ヲ作
意シ此名ヲ附會テ差別トシタランモ不
可知惣テカヽル物トモハ皆近世好事ノ
者ノ作ニテ一向軍記類ニモ見アタラザ
ル事多シテ信ジガタキ也能知ラン人ニ
可尋予モ子哲氏ヨリ鎧頭巾ト号シテ燕
尾。鷹尾。蝶羽。ノ三品ヲ傳タリ是ハ信正ガ
説ノ如キ物ニハ非ジ織物革類ヲ以テ作
ル又鎧頭巾ハ武者振ヲカユル用ト説ヲ
信用シガタシトハ得タリ又是等ノ物平
士ノ具ニアラズトハ如何信用シガシト

トナラバ此文ハイラザルナリ可考

陣はおり ほんとり

陣羽織は古の道服也其始鳥の羽を織て用たる故羽織の名なり今は服の名とす此ものを中世より用たるなるや袖付袖なし其外唐人形当品々の制なりむかしは戦場必用のものとも聞へす当時城地請取などには必用る事なれば平士たりとも用意しすべし地合植物を耻へからず

一貫曰陣羽織ハ古ノ道服ト云其始鳥ノ羽ヲ織テト云フ如何有ベキ軍器考ヲ見
ニ近代ヨリ羽織トイフ物ニモテ軍装ト

スル事アリケリ古ニハカヽル物アリト
モ聞エズサレド古ニ羽ヲ績テ衣トスト
イヘシハ此モノヽ類也サテコソカクハ
名付タラメトイフ人アリト記アリテ信
正ガ説ト不異是モ又前章朝ニ大儀ヲ行
ハルヽ時ト云フ所ノ如ク軍器考ノ奪物
ナラン又軍器考標疑ヲ見ニ羽織ノ字ハ
本字ニアラズ。ハフリト書テ。ハヨリト云
也アフヒト書テア
ヲヒト云フ類ハフリハ放ノ字也ツ
レク草ニ。ハフレニタレトヽ云源氏物語
ニハフラカシヌルト云皆放ノ字也俗語

ニハフリナゲル。ハフリカケルナド云モ
放也ハフリト云服ハ本名胴服也。短クシ
テ胴ノ
ミヲ掩フ故也又別ニ道服ト云物ア 胴服
リ胴服ト同カラズ是ハ装束ナリ
ハ小袖着テ帶結タル上ニ。ハフリカケテ
着ル故俗ニハフリト云也。詞ニテハ。ハヲ
リト云ニヨリテ其詞ニ合セテ羽織ノ字
ヲ付タルナリ羽織ハアテ字ト云物也。西
土ニテ羽ヲ績テ衣トスルハ吾國ノ胴服
ニアヅカラヌ也。且ナ西土ニテ羽ヲ織テ
衣トセシハ軍装也。胴服ハ治世平日ノ服
也。後ニ軍服ニモ用ルナレバ羽ヲ績テ衣

トスルノ事モ引ガタカラム欵トアリ此
説ハ何様據アリ軍器考ノ説モ信正ガ説
モトモニ何據モナケレバ取ニ不足ナリ
素ヨリ古軍記ニ此物見所ナシ近代ノ軍
記等ニハ多ク見アタレリ其二三ヲ舉ル
ニ武邊咄聞書ニ左馬助明知秀俊ハ小姓氏ヲ
呼ビ日頃着タル白練雲龍ノ具足羽織狩野
榮徳ガ墨画也ト秘藏セシ二ノ谷ノ甲ヲ渡シ是
ヲ持坂本ノ西教寺ヘ参リ明知左馬助只
今自害仕候天正十年六月黒田如水ハ子息長政
ガ黄羅沙ノ羽織ニ銀ノ丸ブサ、腰サシ

鹿毛ノ馬ニ乗テ馳通ルヲ見付テ天正三年三

月平松金次郎茜羽織二十文字ノ鎧ヲ持

天正三年四月奥村桐之丞白羽織ニ黒キ桐ノ

トウ付タル着。跡ニ下リ退ケル岡野左内

具足ノ上ニ着ル猩々しょうじょうひ緋ノ羽織ヲ脱小田

切ニ渡シ是ヲ形見ニ見候得ト子妻子ニ

渡シ給レト云北越軍記ニ前田慶治郎利

大ハ黒具足ニ猿皮ノ投頭巾ヲカフリ猩

々緋ノ廣袖ノ羽織ニ脊ニ金ノ切裂ニテ

曳两筋ヲ縫。碎玉話ニ渡瀬小次郎ト名ノ

リテ只一騎真先ニス、ミ茜染ノ袖ナシ

羽織ヲ著金ノ切割ノ幣ヲ腰ニサシ秀吉
具足服織ヲ著牀（床几）几ニ尻カケテ禮ヲ受ラ
ル正宗拝謁シテ中村新兵衛度々ノ手柄
ヲ顕シケレバ時ノ人はヲ鎗中村ト號シ
テ武者ノ棟梁トス服折ハ猩々緋毳鍔ハ
唐冠金纓ナリナド、記アリ其外見所ア
レ氏畧レ之サレバ此物使番ノ渡シ羽織ニ
シテ其形其色ヲ以テ其人ヲワカチ或色
ヲ對ニシテ紋ナドニテ分レ之又一隊々々
ノ色ヲ分別シ或ハ其色モ其形モ其人々
ノ心ニ任カシメ脊袖裳ナドニ相印ヲ出

シテ是ヲワカチ杯スル類ハ諸家ノ軍制
ナリ又是ヲ可着時宜法度ナド又免許ノ
人ナド悉其家々ニ因テ一定ノ事ナシサ
レバ此物異類異形アリ或ハ甲州形。越中
形。唐人形ナド云有テ徐林氏ヨリ圖形数
十品ヲ傳ヘタレ氏甚異類多シテ爰ニア
グルニ煩シケレバ不贅又今俗ニ胴服ト
呼ベル羽織アリテ近キ世ヨリモ用タリ
太閤記ニ作中半兵衛尉ハ甲ハ一ノ谷ノ
立物打タルヲ猪首ニ着ナシ餅ノ付タル
青黄ノ木綿ノ筒服ヲ長々ト打ハヨリユ

ラリくト打見ヘシナリ又山中鹿助ガ傳
ニ母モ尋常ノ女姓ニハ。ニゲナク武ノ道
ニカシコキ事一カタナラズ見ヘシトナ
リ鹿助ニ興シ侍ル人々ニ帷子或ハ筒服
或肩衣。袴。手巾ヤウノ物ヲ送りシカバト
記アリ又此胴服ト云ル物ヲ輕卒ノ者ニ
着サセメテ一軍ノ相卯ナドニモ作ス
今當ノ風俗ニアリ是モ遠カラヌ昔ニモ
角アリシニヤ太閤記犬山ノ城落居ノ条
ニ武藏守ガ使番トオボシクテアサギ羽
織ノ歩者十四五人馬ノマハシニメシツ

レタル武者一騎陣ノ前ヲ再三ノリ廻リ
ケリ武邊咄聞書。太閤薨御翌年ト云条ニ
牧方邊ニハ大筋付タル羽織着タル鉄砲
ノ者松陰ニイカ程モ見ヘ申候又太閤記
秀吉公御舩遊ノ条ニ虎皮ノナゲサヤノ
鎧二百本十文字。長刀何モ金ヲ以テカナ
グシアカ子ノ羽織着シタル中間三百余
人一ヤウニ出立セテ持セ給ヘリ杯見ヘ
タリ是等皆今俗ニ胴服ト云羽織ナリサ
レバ前章ニ云軍器考標疑ノ説又太閤記。
武邊咄聞書ノ赴ニテハ筒服モ羽織モ一

物ナリ太閤記ニ竹中ガ木綿ノ
物ノ通リ武蔵守ノ使番ガ歩者ノ
着ル羽織秀吉ノ中間ガアカ子ノ羽織武
辺聞書ニ鉄炮ノ者ノ羽織ト云物皆々木
綿ナルベシ竹中ガ木綿胴服トアルニテ
其餘ヲモ考ベシ数百人ノ輕率ニ着サシ
ムル羽織ハ木綿ニテ作ル但シ今俗ニハ
ベキヲサシ知_レタルヲナリ
士ノ着ル所ヲバ陣羽織ト云卒ノ着ルヲ
ハ胴服ト云又陣羽織ニモ胴服ニモ袖ノ
有アリ無アリ即チ右ニ云渡瀬ガ茜染袖
ナシ羽織前田ガ猩々緋ノ廣袖ノ羽織ト
アルニテ可知廣袖トアルハ無袖狹
袖ニ對シテ云ヲナリサレ
バ木綿胴服ニモ此差別アリテ袖ノ有ヲ
バ今俗ニ法被ナド、モ呼者アリ是等俗

見紛雜ナル故ナリ又本文ニムカシハ戦
場必用ノモノトモ聞エズト云ルハ何ノ
考ヘナルヤ勿論近代ノ軍記ヲ見ニ軍勢
一列ニ羽織ヲ着ル事トモ見ヘザレト可
着人トシテハ必用ナラデ不叶事ナラン
武辺咄聞書ニ前田家ノ使番鳥毛羽織ナ
リ今當モ使番ノ士ニハ羽織ヲ着サセム
ル家風多分ナレバ是等ノ人ハ必用ノ物
ナラン或ハ物頭物奉行ナドニモ着サシ
ムル家々モアリ其家々ノ軍制ニテ一定
ノ事不可有サレバ諸家ノ軍法ナレバ自

己ヲ以テ他ヲ計ルベカラズ又本文當時
城地請取ナドニハ必用ルヲナレバト有
モ如何是又其家々ノ作法アリテ一定ナ
ルベキニモ非ズ家ニヨリ又其時ニヨリ
テハ陣織ハ不用事アルベシ同シヲナラ
ンニハ城地請取ナドノ時ハ相應ノ服ナ
ラント云ナラバ不聞ニアラザレ氏信正
ガ了簡ニテ諸家節制ヲ定ルニ似タル云
様ハ心得ガタキ事也又地合ノヲナドハ
其人々ノ分限ニ應シテ可作者ナリ考ヘ
シ

鸛ハシ鳥と云も中世戦場の武者詞にて其袖なし羽織也
バントリは本薬網目にもむささびか蝙蝠は蝙蝠ほりの一類
とす羽を張所の似たれは名付たるなるへし續編に
祥也

一貫曰此名中世戦場ノ武者詞ト云フ予
ハ短学ニテ左様ノ事諸軍記等ニ不見當
是又其出所ヲモ顕サス凡例ノ赴失念ト
見ヘタリ何分予ハ不知事ナレバ愚評ス
ルニ不及

一流に具足羽織と号して大道服レの綿入を鎧の上に着
し寒を防く便とす当時用意におよばす

一貫曰此具足羽織ト云名目ハ前章ニ引
所ノ武辺咄聞書ニ明知左馬助英俊ガ白
練墨面雲龍ノ具足羽織ト云物。碎玉話ニ
秀吉ノ具足羽織ト云皆陣羽織ノヲ云
タルニテ別ニ具足羽織ト云物ハ不有證
據ナリ是ハ陣中ニ着スル羽織ナル故ニ
陣羽織ト云又具足ノ上ニ着ル故ニ具足
羽織トモ云ニテ子細モ何モナキ事也サ
レバ信正ガ具足羽織ト号シテ寒氣ヲ防
ク便トスト云ル物ハ後世好事ノ者ノ作
為ニテ席上ノ談ニテ信スベキ物ニハ非

ズ素ヨリ本據トテモ正シカラズ一流ニ
ト迄アリテハ心得ガタシ且ヘカノ明知
ガ具足羽織ヲ着セシ時ハ天正十年六月
ト見ヘ太閤ノ具足羽織ヲ着シ給フ時ハ
天正十八年四月ナリ
テ即武辺咄聞書ニ右ノ年向明知
太閤ノ具足羽織着王シ年月ヲ記セリ又
ハ不見小田原陣ノ時ニテ伊達正宗ニ對
面ノ時下レバ三河後風土記太閤記ナド
ヲ合セ見ニ太閤記小田原御進發チ云条
三月十九日都ヲ立セ給トアリ此書中_ヲ考
ニ天正十八年ナリ後風土記伊達政宗來_ニ
小田原ト云条ニ三月後旬領地ヲ立テ越_ニ
後國ヲ馳過甲斐國ヲ經廻テ四月三日
晚景ニ漸ク相箱根ノ近所底倉ニ着陣
トシ秀吉ノ近士ヲ憑ミ扨謁ノ義ヲ望ケナリ
トアレバ何レ遠カラヌ日對面アリシナリ

ラ^ニン其日ハ不^ニ見當^一氏頓テ暇ヲ賜リテ奥
州ヘ販^リシ文^ニ躰^一見ヘレバ日数アルヲ
可^レハ不^レサレバ夏陣ノ事ナレバ寒氣ヲ防
ク便ニ着シタルニ不^レ有事明ナリ右二本
ニ此時ノ羽織ヲ具足羽織ト書タルニテ
陣羽織ノヲナルヲ可^レ知又本文當時用意
ニオヨバズト云當時ノ二字ハ何ノ事ゾ
信正ガ此書ヲ編シハ寛保ニ^{壬戌}八月吉
旦トアレバ目出度太平今モ不^レ変然ニ當^時
トアレバ昔シハ正ク用タル物ト思ケル
ニヤ可笑シ勿論カ、ル物一向軍記等ニ
モ見所アラズ乍^レ去寒氣ヲ凌ク服ナレバ

古ヘニ不見トテ時トシテハ不用ニモ有
ザルニ坎心得アリテ捨スベシ近キ代ノ
軍記ニ寒氣ヲ防ギシノ見ヘシハ北越
軍記天文十三年^{甲辰}正月橡尾ノ城攻ノ
条ニ餘寒肌ヲ侵シ寒風猶頻ナリ景虎ハ
鎧ノ上ニ衣服ヲ引掩ヒ又天正七年^{己卯}
御館ノ城軍ノ条ニ二月下旬ナリ餘寒モ
少シ公リ雪モ村消ニ候時分^畧北条丹後
守長國ハ具足ノ上ニ小袖打ハヲシ又武
邊咄聞書ニ文祿二年正月廿六日辰刻也
朝鮮ハ寒國ニテ寒ヲ不斜長政^{黒田}ハ大綿

帽子ヲ着。甲ハ郎等ニ持セシガ隆景川小早

ノ先手へ出ルトテ綿帽子一貫曰此綿帽

異品アリ異品ト云ハ五枚張ノ當世頭形
ト云鉢ノ上ニシロカ子ノ作物カケタル

物ニテ置手拭ノ髷ト云類ナリ爰ニ長政
ノ着タルト云綿帽子トハ違ヘリ長政ノ

用タルハ實ノ綿帽子ニテ髷ノ作り物ノ
ヲニハ非ズカ、ル類世ニ紛シキヲ甚多

シ同名別物ヲ脱キ甲ヲ取テ着シ無レ隠例ノ
ナルヲ可レ知

水牛ノ甲也ト記セリ可レ考サレバ寒天ノ

在陣ニハ其心得アエウベキ事ナラン但

シ本文ニ云大道服ノ綿入羽織ト云物其

人其時ニ随レテ不用ト強テ云ニモ不レ有ト

モ是等ノ物士卒一統ニ嗜持スベキヲハ

煩ク難成ケレバ其人々相應ニ心得テ寒
氣ヲ凌クベキ手當時宜アルベシ都テ陣
中ノ事物ハ。タゞく省畧ヲ專要トスベシ
前章ニ云景虎長國ノ杯ノ事跡モ大道服
ノ綿入羽織ト云物ヲ着シタルニ非ズ其
時其人ニテ取捨アルベキヲ坎可考今當
太平ノ結構安坐ノ様子トハ雲泥玉石ノ
相違ナルヲ可有既ニ大坂夏御陣ニ公儀
ノ御臺所只長持一ツニテ相濟御膳米五
升^{ほししい}干鯛一枚并糰樽其外味噌鰯節。香ノ物
ト武邊咄聞書。難波戰記雨夜燈
此書ニハ
膳米五升

鰯テ鯛一枚。味ア噌ナド見ヘタリ又武辺咄聞
書二本多佐渡守正信。洪帽子ニテ具足ハ
不着甲計着テ大團扇ニテ蠅ヲ。ハラヒ屋
根ノサキ行駄アシ乗物ニ乗テ御供ナリト有
米澤ヲ打立候時詮義シテ云先祖相傳ノ
鎧一領ナラデナシ。數度ノ陣ニ着フルシ
タル物具ナリ。國方ノ坪軍ニテハ不苦此
度兩御所様ハ二条伏見ニ御在城ニテ京
着ノ軍兵ハ皆野路。篠原。石部。坂本。ヨリ物
具シテ京入スルトノ風聞ナリ兀ヘタル鎧

見苦カルベシ如何セント談合スルニ一
手ノ物主サへ着替ノ鎧不持田舎風ナレ
バ外ニ可借鎧ナシ常陸ハ奥アルモノニ
テヨリく分別コソアレトテ猿樂ノ装束
能ノ^(法)被ヲ具足ノ上ニ着テ摂州ニ罷立
候ト見ヘタリ彼はヲ並べ考へ戰國ノ人
ノ意氣ヲ可察事ナリ今世賣物ニ拵ヘタ
ル故實物軍法者流ナド古今ノ時変ヲモ
不辨其人ノ位ノ高下其禄ノ大小ノ差別
シモカマハズ。エナラヌ器物杯取出シ教
トスル故ニ喩バ義經ムレタカ松ノ俗画

ヲ見テ今時刀ト称スル物ニ虎皮ノ尻鞆
ヲ懸。篠。簾。當ノ裏ナシニ頬貫ヲハキ雜賀
鉢ノ兜ニ龍頭。鍬形。桶皮。佛胴。ナドノ具足
ニ袖。草摺ヲ紫下濃ニ威真似ンヲ欲ス
類其外種々様々ノ器物席上ノ理談ニ驚
サレ至テ乏少ナル身上ノ士モ旗。幕ノ類
ヲモ用意セントシ不相應無益ノ物ニ金
銀ヲ費シ華奢ナル道具ヲ求ンヲ願類
少ナカラズ是皆不埒ノ師範者ニ惑サレ
賣物ノ流義ニ誰カサレ實用本意ヲ取失
フ者也能々思案スベシ又餘リニ省畧ニ

ノミナガレテ我儘ニ不可成又耻ヲモ忘
ルベカラズ

鎧上に隨身する品々

平士鎧にはな紙袋を付て要用の品を入まし又
小袋に納めて身に帶るもよし人々試て覺悟すべし

一貫曰是等ノフ其人々ノ心任ニ覺悟可
有ナリ但シ鼻紙袋ハ馬手下散ノ裏ニ逆
付ニスベシ利用也又小袋ニ納テトアル
小袋ノ制イカニヤ惣テ甲冑シテハ隨身
必用ノ物。腰ノ廻リニハ多シテ煩キモノ
ナレバ少ニテモ減少スベキフ肝要ナリ

然ニ何程便利ノ小袋ニテモ是ヲモ付テ
ハ宜カラズヤハリ鼻紙袋ニテ用ヲ作ス
ベシ古代ニ燧袋ト云物アリテ刀ニ附テ
帶タリ信正ガ小袋ト云物是等據タルト
モ思レズ燧袋ト云物ハ尤古ク見ヘタリ
武林原始ニ古事記ノ倭比賣命
賜艸那藝。劔御囊於倭建命ノ事ヲ引タリ
又盛衰記。太平記ヲモ引タリ予モ此物ノ
故實制作等子哲氏ヨリ授リ又伊勢
氏ノ説モ有ケレド爰ニハ漏ラシヌ用ニ
足ザラン且平士ノ鎧ニ。ハナ紙袋ヲ付テ
トアレド平士而已ニ限リタル事ニハ有
ベカラズ物主。物奉行トテモ鼻紙袋ハ附
テ害ナキヲナリ信正何ノ故ニヤ平士鎧

ニトハ云タルヤラン合点参ラズく又碎
玉話大坂冬陣ノ条ニ基次一貫云後藤又兵衛ナリ左
ノ小指ニ傷又重成一貫曰木村長門守ナリ見テ手ヲ
負レタルヤト問。基次鼻紙ニテ。ヲシ卷我
吉例ナリト云ト見ヘタリ如是鼻紙ヲ出
シテ其指ヲマキタルナレバ鼻紙ヲ入テ
持用シタルナルベシ可考

大小の腰固は必持へし 別条に詳也

一貫曰此条前章ニ評ズル故ニ爰ニ不贅
但シ倍正ガ大小ノ帶様ニ随フ時ハ必用
勿論ナルベケレド又腰當ノ異品アリテ

人々ノ會得一様ナラズ難足者也何分是
シキノ物嗜持シタリ_レ吒サマテ邪魔ニモ
ナラヌ_レナリ假令大小ヲ不固_レ吒調宝ノ
物ナラン可考く

丸散芝葉血留馬の息合磁石栄の類必持へし
いにしへ矢立硯を箆に付しも故なり梅干を縞に包
て胸の辺に付へし或傳に梅干は食すへからず取
出し見て渴を助るといへり是梅林の故事に拠もの也
糸針袖き苧繩_{二尋斗}持へしを必持へしと師傳なり

一貫曰是等ノ類ハ自己ノ所存ニマカセ
邪魔ニナラザル物ハ取捨持用シテ可也

丸散血留息合ナドハ重宝ト云ベシ其餘
ハ猶其人ニヨルベキニヤ但シ古へ新羅
三郎義光ウツボヨリ笙ノ譜ヲ取出セシ
ト古今著間集ニ有ヨシ伊勢氏ノ説ニ見
又平家物語敦盛最後ノ条ニ首ヲツゝマ
ントテ鎧直垂ヲトヒテ見ケレバ錦ノ袋
ニ入ラレタリケル笛ヲソコシニサゝレ
タル。アナイトヲシ此アカツキ城ノ内ニ
テ管ケンシ給イツルハ是人々ニテヲハ
シケリ又源平盛衰記タゝノリ通盛等サ
イゴノ条ニ物ノグトラセケルニ一クハ

ンノ。マキモノ有マキモノヲヒラキミレ
バウタ氏オホクアリケル中ニ杯ト見ヘ
タル行跡ハ最モ別論ナラン又近世モ義
士礧貝十郎左衛門正久夜討ノ時持タリ
シ鼻紙袋ハ紫縮緬ちりめんフクサニテ包右ノ下
緒ノ切レニテユヒ有之候。レ琴ノ瓜一ツ有
之候ト義士對話ニ見ヘタリ。此義士對話
ニ十七人ノ義士御預ノ始終ヲ書タル者
ナリ其取扱ノ役人堀内傳右衛門ガ記ニ
テ實正力ハル品物ヲ戰ノ場迄モ身ニ添
タルヲ情フカキトヤ云ベキ兎角頑ニ愚
ナル人ハ一隅ニ而已泥ミテ偏僻少カラ

ズ能々。彼是ヲ熟味シテ用。不用。好。不好ヲ
取捨シ持用有ベキナラン。又古代矢立
硯ヲ箠ニ付シトアルハ平家物語木曾ノ
願書ノ条覺明ガ其日ノ。テイタラク。カチ
ノ直垂ニ黒絲威ノ鎧着テ。コクシツノ太
刀ヲハキ二十四サイタル黒ホロノ矢負
塗ゴメドウノ弓脇ニ。サミ兜ヲヌイデ高
紉ニカケ。箠ノホウダテヨリ小硯疊紙取
出シ木曾殿ノ御マヘニ。カシコマツテ願
書ヲカク。アツハレ文武ニ道ノタツシヤ
カナトゾ見ヘタリケル敦盛記義經京入

ノ条ニ矢立ノ硯トリヨセテ宇治川ノ先
陣ト。剛ノ者トヲ次第明々ニ注シテ鎌倉
殿へ見参ニ入ベシト仰ラレケレバ軍兵
各勇ミヲナシテ描忠トゾ色メキケル又
武門故實百ヶ条ニ懷中硯ヲ矢立硯ト云
フモ古キ事ナリ引田妙源具足ノ引合ヨ
リ矢立硯取出シ願書ヲ。カキタルヨシ太
平記ニ。シルセリトアリ又近キ代ニハ武
邊咄聞書ニ明知秀俊自害ノ条ニ馬ヨリ
下リ手綱ノマガリヲ切テ堂ノ格子ニ伴
キ付。頭ヲ高ク張上ケ矢立硯取出シ紙札

二明知左馬助秀俊唯今湖ヲ渡タル馬也
ト書付手取髮ニ付置其身ハ城ニ入ト記
セリ彼是ヲ並べ考ルニ陣中ニ矢立ノ硯
持用セシ證據明ケシ乍去此物古代ト近
世ト其人ノ事跡ニ時變アリ又其器物ニ
モ差別アリテ愚按ノ趣モアリケレド繁
文ニナレバ爰ニ不記何様是ヲ好ン人ハ
持用シテ調宝ナラン其制ハ今時ノ俗作
ニ随ヒ猶便利ヲ工夫シテ可ナリ縦ヒ古
制ニ因テ作爲シタリ凡當用ノ間ニ不合
事ハ用ニ不足其餘ハ其人々ノ了簡ニテ

一定アルベカラズ又梅干ヲ絹ニ包テ胸
ノ辺ニ付ベシ或傳ニ梅干ハ食べカラズ
ト信正ノ云ル俗傳世ニモ用ル者モアリ
ケルニヤ武門故實百箇条詳註ニ或説ニ
カノ引出ノ筥ニ箆ニ筥ノナリ梅干ヲ入置テ
人馬ノ渴ヲ凌クノ備トス是梶原ガ箆ノ
梅ノ真傳ニテ秘説ナリト云リ利口ナル
新説ナリ近世ノ諸説此類多シ惑フ人少
カラズト記サレタリ又雜兵物語。鉄砲足
輕小頭ノ条ニ。カヒニ働テ息ガ切ベヒナ
ラバ打飼ノ底ニ入テ置タ梅干ヲトニ出

シテ一寸見口必[○]ズナメモシナヒモンダゾ

食事^フハ扱置ナメテモ咽ガ、ワク物ダ程

ニ命ノ有ベイ内ハ其梅干^ッ一大切ニシテ

息合ノ藥ニトン出シテ見テツ、ハメく

クハナヒモンダト記セリ又新藤勝上^{大坪}

^{流馬術者}予ニ教シ息合ノ傳ニ梅干ノ閉ヲ煉

タル藥方アリ是ヲ轡ノ組違ニ結付ル事

ナリ予モ遠乗シタル時[○]此息合ヲ用タル

ヲアリキサレド其切能トオボシキ事曾

テ不分明ナリ此餘梅干ヲ以テ渴ヲシノ

ギタルガ如キヲナケレバ何トモ云ン様

ナシ勿論予ハ短学ニテ古軍記ノ類ニ梅
干ヲ以テ渴ヲ凌キタルト云フ不見當渴
ニ及テ水ヲ吞タル者ハ近世ノ軍書碎玉
話。武
辺咄聞
書ノ類ナドニモ見タリキ。タゞく其實事
ヲ考ヘ席上ノ理談ニ而已迷フ事ナカレ
又梅林ノ故事トハ可然書ニ出所有ベケ
レド予ハ短学ニヲ所見ナシ幼年ノ頃通
俗三國志ヲ讀タリシニ決勝負賈詡談兵
ノ条ニ時ニ建安三年夏四月曹操淮南ヨ
リ都ニ回リ朝ニ出テ天子ニ見ヘ早ク張
繡ヲ討ントテ兵ヲ調テ打立ケル畧時ニ

五月ノ末ニ到リ南陽ヲ指テ進ムニ諸軍
ミナ。長途ニ疲レ山路ヲ経テ打通ルニ暑
氣タヘ難ク喉カハヒテ水ヲ求レト水ナ
シ上下息ヲ休メテ暫ク進マザリシカバ
曹操ヒソカニ計ヲ案シ出シ馬上ヨリ鞭
ヲ以テ指ヲシヘ此ヨリ先ニ梅ノ林アリ
早ク行テ梅ノ實ヲ取レト云ケレバ諸軍
ミナ口ニ津ヲ生メ少シモ渴セズ忽チニ
難處ヲ越ケリ世ノ諺ニ梅酸ノ渴ヲ止ル
ト云ハ此ナリト見ヘタリ是等ハ梅干ノ
説トハ別論ニテ臨時ニ至リテ其將タラ

ン人ノ器量ニアルヲニテ凡テ是類ニ限
ベカラズ尤味ヒフカシ梅干ヲ持用スル
ガ如キハ其糟粕ニモ非ズ工夫アルベシ
く世俗ノ傳ニ忠度ノ短冊箴。梶原ガ花箴
ナド云類アリテ人ヲマドハス梅干ノ説
モ相似タル者欸猶可考又糸。針。苧繩ナド
ノ類ハ調宝ノモノナレバ持用シテアシ
カラジ乍去二尋計ト云シハユキツマリ
タリ

鼻紙はすみを二所程とちて持まし古疊紙を持し
故實續編にのす當時は鼻紙を用てよし

一貫曰鼻紙ハ必用勿論ナリ古人事跡ヲ
引ニオヨバズ本文ニ二所程閉テトアレ
ド鼻紙袋ノ中ニ入ルヽニハ閉ルニハ不
及又鼻紙袋ヲ不附ニハ此閉ヲシテ具足
ノ引合ニ入テ持ベシ其持用ニ利ナル事
アリ工夫スベシ又古ヘ疊紙ヲ持シ故實
續編ニノストアレド其書ヲ得ザレバ是
非ナシ伊勢氏ノ説ニハ大タヽフ紙ハ公
家衆束帶ノ時用ル物ナリ武士甲冑ノ時
用ルニ不及也古ハ今世ノ鼻紙。小菊。上田
小杉。ナドヽ云紙ハ無之サレバ杉原紙ヲ

タ、シテ懷中ス是ヲタ、フ紙_レ。フトコ
口紙_レ。鼻紙_レ云テ諸用ニツカフ。今世
ノ鼻紙ノ如シ平家物語ニ箆ノ方立ヨリ
小硯疊紙取出シトアリ物ヲモ_{（書）}也ト云
如是紙ト云物モ古今同シカラズ又所々
ノ産物アリテ異ナル者也タ、時宣ニ随
ベシ何様是等ノ。武士戰場ニオヒテ作
法ナド有。ニハ不有其時ノ便利ニ任_セ己
ガ心次第タルベキナリ賣物ニ拵タル禮
法者流ナドニ惑ハサル、。ナカレ。カ、
ル鎖細ノ事ハ習トスルニ不足イカヤウ

ニテモヨシ

小粒鳥目も少斗は隨身すべし小粒は上帯の内へ入持事
かの条と互見すへし

一貫曰是等ノ₇ハ其人々ノ心任ニスベ
シ但シ上帯ニ巾着ヲ付テ藏ルハ不便利
也持ベキトナラバ別ニ持ベシ論ズル程
ノ₇ニハ非ズ如此事_レ迄習傳口訣トセバ
世界ノ雜事際限アルベカラズ後ニハ飯
ヲクロフハ。口ニ入ル、物ゾト教ル様ニ
ナラン又小粒ハ上帯ノ内へ入持ト云鳥
目ハ何トモイハズ鳥目ト小粒トハ一所

ニハナラヌ事アリヤ笑ベシく

(糧)

腰兵糧は持やう品々あれば洩染の布に包腰に付るに
しくものなし夏は唐からしを二つ三つ包込めはめし損
せずしてよし

一貫曰此物ハ箆理ト云物ニ入テ今世俗
ニ打チガエト云ル両口袋ニ藏メ腰ニ付
ルヲ最上トスベシ其餘異制ハ不可用縦
ヒ上代ノ制トテ嗜用スル者アリ凡煩キ
制ヲ真似ベカラズ無用ナリ腰兵糧ハ大
身ニテモ持用勿論ナラン三河物語ニ天
野宮内右衛門踐信長跡ノ条ニ天正二甲
戊

年四月乾へ腰兵糧ニテ御働有之ト記アリ又武辺咄聞書高麗陣ニ清正人数ハ何モ物具シテ箆食付。旗指物推張鉄砲ニモ火縄ニ火ヲ付タリ又清正腰ニ付タル緋曇子ノ囊ヲ解テ坐敷へ抛入ラル、ニ疊ヘドウド落ル見レバ米三舛。テ味噌。銀錢三百ト記セリ。此曇子ノ囊トアル囊ノ字ニウチカヘト假名ヲ付タリ又北越軍記ニ前田慶治郎。純子ノ囊ニテ味噌乾糲ヲ入鞍壺ニ置種子嶋ニ艇付テ乗替ニ牽カスル。是モ囊ノ字又碎玉話耶穌ノ賊起時トアル条原田ハ古ノ原田

ガ末葉也其被官筋ノ士氏腰兵糧ヲ付テ
來リ従フ者。五十餘人原田ガ前ニ立塞リ
テ力戦スト見ヘタリ此原田ハ寺澤兵庫
頭ノ臣原田伊豫ト
云勇士差物ハ蓼ノ
シナヒナリトアリ如此近代ノ勇士ノ事
跡アルニテ其物モ便利ニテ宜シケレバ
ウチガエブクロヲ以テ最上トスベシ其
制安ラカナルアリ布一幅ヲ二重合セ碁
盤ノ目刺ニシテ長サ七尺計兩角ヲ取テ
中ニ通り伏縫ニ合ルナリ故ニ縫立タル
形ハ縫目。子ジレテ直ニハ非ズ兩口ナリ
此制ヲ可トスベシ又雜兵物語ニ數珠玉

ト号シテ袋アリ其圖形ヲ見ルニ襟ニ真
中ニ掛テ前へ取。腋ノ下ヨリ後ニ取り。腰
ノ上ニテ結留タル躰ヲ画キタリ数珠玉
ト名付ルハ其用物ヲ一種ツゝ入テ其間
々ヲ。クゝリ留タレバ其形鶏卵ノ形ノ如
クニ數多連リテ数珠ノ輪ニ似タレバ此
名アリ是ハ其用物ヲ種々入テ別々ニシ
入紛。レ間敷爲ノ制ナルベシ但シ其別々
ハ宜シケレト取出シ度アル物モ順々ニ
取出サレバ其志ス物取出ス事ナラズ
至テ煩キ制ニテ不便利ナルベシ其上カ

ハル物ヲ襟ニ掛後。腰ニ下置テハ働ニ害
アリ可考又此餘ノ異制ヲモ用ユベカラ
ズ是等ノ制ハイカニモ素直ナルヲ可ト
スベシ又夏日飯ニ。トウガラシヲ入ル
随分俗ニ作スヲナレド予ハ其切ヲシラ
ズ

繡袋^{ホシイ、}は延喜式にも出て兵家の古法なり布もめんの
類にて四必ず四方に袋に縫て中を三通りはかり假
にぬい切りその畝の間々に繡をつめ四隅に結^(織)を付
胴の服の内の方じえ四隅を釣べし但繡袋は用る時
と不持時と有へし腰兵糧は常に身をは肌すへからす

一貫曰軍防令ヲ見ニ凡兵士每火^畧飯袋
一口トアレハ飯ヲ袋ニ入テ持用スルヲ
尤古シ又武林原始ニ三代實録ヲ引曰小
野春風進起請其一日軍旅之儲^云其二
日軍興不虞倍^シ日僂^テ行轉飼^ヲ易^ク絶^ヘ輜重難^シ給^ヒ
望^ミ請^フ以調布縫造^ニ納^ル繡帶^ヲ帛千枚^ヲ可^レ帶^テ士卒^ニ
腰底^ニ以支^ル急速^ニ之備^{トス}ト見^上ヘタリ又今昔物
語^〇河内守源賴信朝臣上野守ニテ其國ニ
アル時ノ条二十日バカリノ粮ト乾飯ヲ
出サシメテアタエサセ宇治拾遺物語獵
師佛ヲ射条ニヒサシクマイラザリケレ

バ餌袋ニテ飯ナド入テ。マウデタリ又参
考平治物語信賴降参ノ条ニ乳母子式部
大輔計ニゾ成ニケル餘リニ疲レテ見ヘ
給ヘバ或谷川ニテ馬ヨリ抱下シ干飯洗
テ進ラセケレドモト見タリ即前章ニモ
述ル通り飯袋ト云物ハ上代ノ正史ニモ
見ヘテ要用ノ物ナレド今當好事ノ者古
制ト号シテ用ル類ニハ甚煩シク當用ニ
不應物アリ假令正キ製造ノ物ナリ凡時
宜ニ不合ハ不可用本文ニ兵家ノ古法ナ
リト云糒袋モ不便利ナリ用ルヲ勿レ胴

ノ腹ノ内ノ方へ四隅ヲ釣ベシト有レ甚
煩キニアラズヤ又繡袋ハ用ル時ト不持
時ト有ベシトハ聞ヘザルニモ非ズ時ト
場ニヨリテハ左モ有ベキニヤ但シ其子
細レヲ不顯レバ不分明ナリ是ニテモ凡例ニ
モ云帶甲ノ捷經ト云者ニヤ合点参ラズ
又兵家ノ古法ナリトテ延喜式ノ書名ヲ
モ出シタレド其文面レヲモ不引レバ是又不
分明ナリ彼三代實錄ニ以調布縫造納繡
帶袋千枚可帶士卒腰底トアレバ腰ニ付
ル事古制ニテ殊ニ便利安ラカナリト云

ベシ信正兵家ノ古法ト云ナガラ三代實
録杯ノ古法ニ不據ハ如何縦ヒ正キ古法
ナルニモセヨ腹ノ内ニ糧ヲ帶ルガ如キ
六箇敷事ハ不用足信正ハ速着ノ事ヲ專
一トシテ既ニ脉数三四十通ノ内ニ六具
大小マデ揃立出ル杯トイカメシク便利
而已理不盡ニ好メルニ胴ノ腹ノ内ノ方
ニ繡袋ヲ四隅ニ釣テモ彼速着ナドノ障
ニモ不成事ニヤ予ガ如キ愚昧ノ者ハ合
点ユカザル也是等ノ次第ニテモ信正ガ
此書ヲ編タル赴察セラル、ナリ必シモ

(珍)

珍奇ナル説ノミニ泥ムヲ勿レ又腰兵糧

ハ本文ノ通り可ナリ

馬上の槍こし当に信玄流とて鉄にて造たるもの
甲州の遺法にや信用し難し馬上のやりは鎧のやない
はの内へ建て持或は脇にはさんて馬の平首にそへ手綱
にてとめて持をよしとす或は森の中を往時は槍
の太刀打を右の手に持て槍の柄を跡へ引すりて持事も
ありこれらの事自らに試て受用とすへし槍腰当は用
意に及ましきにや

一貫曰此事予モ若年ノ頃山田友歳

大坪
流馬

術者
二軍馬ト云事ヲ習シ時聞タル事アリ

キ是ハ本文ニアル鑢納トハ違テ鐙ノカ
革ニオサムル仕様ト鋏ノ下リニテ藏ル
トノ二ヶ条ニテ一應ハ聞ヘタル事ナレ
ド實用ニタツベキ所思ハレズ勿論馬上
ノ鑢腰當信玄流ナド云物ハ用ニ不足歟
鑢ヲ馬上ニテ持用スルニ腰當ト云フヤ
アルベキ笑ニ絶ルナリ鑢ヲ腰ナドニ付
ン事至テ愚作ナルベシ信正信用シ難シ
ト云ヒ自分ニ試シ受用トスベシ槍腰當
ハ用意ニ及マジキニヤトハ得タリトス
ベシ元來是等ノ事ハ軍記ナドニモ一向

見ヘズ好事ノ者ノ作爲ニテ信玄流ナド
、信玄ニ託タル者ナラン歟可思惟又井
尻孟雅氏匹田流槍術師範ノ一傳ニ馬上ノ槍ノ
事ニケ条アリ此傳ハ格別ニテ右等ノ聚
類ト同論ニ非ズ是ハ正直ナル事ニテ其
人ヲシテ面授ナラザレバ的當セザル故
ニ爰ニ不記又参考太平記ヲ見ニ住吉合
戰ノ条ニ阿間了願ヲ馬ノ平頸ニ引添テ
少モ擬議セズ懸出タリトアリサレバ鑑
ヲ馬上ニスルハ平頸ニ引添テ持事安ラ

カト云ベシ素ヨリ此餘時トシテハイカ
ヤウニモ持用シテ可ナリ一概ニ思ベカ
ラズタゞ席上ノ理談ニ惑サル、ヲナカ
レ又奇異ナルヲ取ベカラズ可考者也
又予ガ馬上ノ槍ヲサメノ工夫アレド長

文ニナレバ爰ニ不記

水のみは必用へし世に云信玄流と云物尤よろし但し
紙にてはりぬきとるはしめりをうけてあしく七八寸迫り
の竹を六七寸斗に切二つに割てそはを少削落し
て再合すれば打ひしなりになるを漆にてあわせ上下
を板にて塞きのみ口の管竹をさし入る事法のことくし

扱合せ目の方よりまん中に横さまに篠竹を通して其中より緒を引通し其結を以て上帯に留むへし返り角結しめなとて帯にと至れとも動きて心なしし成はめし仕い足軽などの水のみは丸竹のふしをこめて切丸竹の儘用てもよし此造り様書取難し造り試て自得すへし

一貫曰此物ハ信正ノ云通り必用ノ物ナルベシ又重宝トハイヘ氏隨身ノ用具水筒ヨリ猶必用ノ物アルベケレバ其時其人トシテハ取捨了簡ノ可有_レナラン坎但シ此物ノ制種々様々アレド甚愚制多シ信正ガ信玄流ト云物ハイカニヤ尤ヨ

ロシト迄ニテハ合点ナリガタシ又武器
普録ニハ桐ノ木ノ挽キモノカ又ハ銅ノ
亀甲ニシタルヲ細袋ニ入テ持用スベシ
竹ノ水筒ハヒシゲ易シトアリ此等ノ制
聞ヘタレ氏不可ナリ信正ガ制ハ遙ニ勝
レタリ又予ニ徐林氏ノ教シ水筒ハ五六
寸廻リノ竹ヲ長サ九寸計ヨリ一尺二節
ヲコメテ切り二ツニ割テ其端ヲ程能ク
削リ取菱形ニ成タル時漆ニテ合セサキ
ホソク削リ落シ其上ヲ草ニテ二三ヶ所
卷。漆ニテ塗ヘシコハ桐ノ木ニテ仕込漆

付ニシ真中ニ呑口ノ管竹ヲ入ル是モ漆
付ナリ此管竹ノ長サハ頰當シテ吸出サ
ル、程ヲ可トス又此口ノ蓋ハ木ヲ削差
込テモ紙ヲ捻テサシ込テモ濟タル也
大躰鉄砲ノ腰筒ト云物ニヒトシ是ハ弓
手ノ腰。大小ノ鞘尻ノ方ニ水筒ノ口ナシ
テ待請ノ下ノ方ニ指込置ベキ仕様ナリ
水ハ澤山ニ入ザレト働ノ害ニハ少シモ
ナラヌナリ制作モ當分ノ物ニテ手間取
ラズ此制可シト云リ考ルニ信正ガ制ト
大概同キ物ナレト腰ニサシコム故ニ働

ニハ随分手輕テアシカラジ元來水筒ハ
重宝トイヘ^レ三軍人毎ニ必用スベキニ
モアラズ又時ト場ニヨリテハ各持用ス
ル^ヲモ有ベシ制作モ一樣アル^ヲナラズ
人々ノ作意ニ任セテ間ニ合スベシ近代
ノ軍記ナドニ水筒ヨリ水ヲ出セシ^ヲモ
予ハ短学ニテ不見當碎玉話大阪夏陣ト
云条ニ西村ハ幽ニ其聲ヲ聞テ見捨テ逃
タリト思ヘリ少間アリテ腰手拭ヲ水ニ
浸シ持來テ口ニシボリ入[。]氣ヲ付テ肩ニ
カケ營陣ニ歸レリトアリ又忠野左文ガ

条ニ差物ニ一足不去ノ忠野左文ト白キ
布ニ以墨書付テ終ニ押付ヲ敵ニ見セザ
ル大剛ノ者也アル時負軍ニ遭テ隊々悉
ク崩レバ一人蹈トメテモ可救味方ハナ
シ不入處ノ犬死ゾト思ヒ引取テ息ヲ繼
ク細谷川ニ至テ水ヲ飲ニ差物ノ影水ニ
移レリ左文自見之テ黒ク逃タルニハア
ラ子ド一足不去ハイカニト人ニイハレ
ン時答ン詞ナシソレヨリ引返スト見ヘ
タリ右等ノ時ニ水筒ハナカリシカ可考
く水筒ヲ嗜ントナラバ手輕制作ヲ可ト

ス又信正ガ丸竹ノ節ヲ込メテト云水筒
時トシテハ可用ナリ何様是程ノヲニ傳
授口訳ナドノ有ベキヲナラズ其人々ノ
心任成ベシ勿論軍勢人ゴトニ水ヲ用意
サスル事。時ト所トアラン凝附タル軍法
者流。故實者ナドノ知ベキ所ニハ非ズ

徒者足輕たり共水のみは必持まし足輕は水なき

地にては筒洗ひに此水を用る事有へし此品要用の物なり

一貫曰本文爰ニ水ノミハ必持ベシト云

水ノミト云物ハ前ニアル水筒ノヲニヤ

俗ニ水呑ト云物ハ小キ。ヒシヤクニ緒ヲ

附テ常ニ山野ニ遊時用ル者ナリ又椀ノ
如キヲ革。或ハハリヌキ杯ニシ鑲ヲ打タ
ル物モアリ此物ニハ有ベカラズ是ニシ
テハ文義スマヌ也。サラバ水筒ヲ水呑
云ニヤ合點参ラズ元來水筒ヲ右ニ述ル
如ク時ト所ト其人ニテ取捨有ベキ者ナ
レバ時宜ヲ可考又鉄砲ヲ用ルモ其場其
時アリテ一足ノ事ハナキ者ナラン鉄砲
サエウツ時ハイツモ筒ヲ洗フ物ニモ非
ズ一概ニ思ベカラズ又水ノ無所ニテハ
一滴ノ水モ大切ノ物ナレト水筒ノ水ノ

如キニテ各鉄砲ヲ洗フモ如何アルベキ
但シ各水筒ノ水ヲ一所ニ器ニウツシ鉄
砲ヲ各入テ洗フハ成ベケレド其自由
叶フ程ノ場所ニテハ又水モ不自由ニハ
有マジヤト云ベキ歟何様是等ヲ論ズル
ハ何レモ二席上ノ談ナレバ空シキトヤ

云ン思惟スベシ

手拭は緝(紺)のもめんを長さ二尺はかりに切便よき所に
留置へし或は水にひたし持也口を沽ウルす流有又長手拭
斗りにて此手拭を不用もありすへて函の具に緝染を用
るは血付ても跡なきか故也本綿は、みは取分よろし手

綱長手拭の類もめんは、みを用て可なり

一貫曰是ハ必用ノ物ナリ既ニ碎玉話大
坂夏陣ノ条ニ西村ガ手負タル時馬取弥
右衛門ト云者はホドノ手ニ弱ルト云事
ヤ候トテアトニ歸ル西村ハ幽ニ其聲ヲ
聞テ見捨テ逃タリト思ヘリ少間アリテ
腰手拭ヲ水ニ浸シ持來テ口ニシボリ入
氣ヲ付テ肩ニカケ營陣ニ歸レリ一貫云
西村ハ
眞田左衛門佐幸村ガ兵士
西村孫之進ト云勇士ナリト見ヘタリ如
此水ニ浸シナドシテ用ヲナスハ時ノ働
キナルニ信正或ハ水ニヒタシ持テ口ヲ

ウルヲス流有ト云フ餘リニ好事ナリ手
拭ヲ水ニ浸スガ如キフヲ流アリナド、
云フヤ有ベキ。ケ様ノ事ニ流義ハ不可有
笑ニ絶タル者也又染色緝ヲ用フ可然但
シ一概ニ思フベカラズ又長サモ人ノ好
ニ依ベシ又ミヅミノ木綿長。手拭。手綱ノ
類ニ可シトハ得タリ試テ可知モノ也

長手拭は必用の物也三尺手ぬくいと云も是也もめん
ちゝみの緝染を一尋半に切てのはしをは帯の如くたき
合せ三寸斗袋に縫置へし用る時はかたくの鑑を
右の上帯へ一からみからみ残りをは腰にまとい置へ

し上帶の上へ廻してむすひ置或はたゝみて腰にはさ

むもよし此物注用多し弓鉄炮を輪束ワツソクにかくるに

は右の腰にからみたる長手拭の鑢ハシの袋にもと彌ムにても

いなこ尻にてもあし入後□に左高に負なし長手拭の

かたくをおより取揚ヶ左の肩の上にても弓にても筒にても

引かけ一トからみからみて其鑢を胸へ取て二つ三つとぢり

置はワツソクに留り自由よし此長手拭は平士に不限

足輕従者等にも必持へし但三尺にて少短し試し知へし

一貫曰此物調宝ナリ諸用多シト知ベシ

但シ弓。鉄砲ヲ負事本文ノ仕様モ悪シカ

ラシ予此文ニ随テ試タリ又予ガ負様ア

リ是ハ弓ノ彀附ノ上ニ長手拭ノ端ヲ括
付弓ヲ逆ニ本彀ヲ右ノ肩^上ニ出シテ彼
ノ手拭ヲ右ノ肩ヨリ前ニ取り左ノ腋ノ
下ヘ取テ弓ノ大中ノ邊ヘ括付テ留ベシ
弦ハ右ノ方ヘ伏セタルガ可シ取ント欲
スル時ハ左ノ脇ノ下ヨリ前ヘ引出シテ
取ベシサスレハ弓順ニ手早ク取^ラルヽ也
安ラカニテ利用ナリ試テ可知又雜兵物
語ノ圖ニ鉄炮ヲ袈裟掛ニ負^レフタルアリ
是モ長手拭ニテスル事也又予ガ鉄砲納
メハ此長手拭ヲ以テ鉄砲ノ火皿ト摺割

目當トノ間ニ結付右ノ腋ノ下ニテ巢口
ヲ向ヘ臺尻ヲ後ヘシテ彼結付タル手拭
ヲ左ノ肩^上ヘ取テ前ヨリ右脇下ニテ能
程ノ所ヘ結付夫ヨリ左ノ肩^上ヘ引上ル
ト鉄炮ハ逆様ニ臺尻左ノ肩ノ方ヘ上サ
マニナリ筒先ハ右ノ方脇腰ヘ下ル也如
此シテ負時ハ釣合モ悪シカラズ又取時
ハ右ノ脇下ヨリ取^ル故ニ鉄砲ノ勝手ヨク
手廻ニナルナリ但シ雜兵物語ニ見ヘタ
ル負様ハ臺尻ヲ右脇ヘ筒先ヲ左ヘ本様
ニ負フ故ニ釣合ハ至テ宜シケレド少シ

手廻ニ悪キ所アリ試テ可知何レ如是シ
テ負フ時ハ太刀打杯シテモサシテ害ニ
モナラズ鉄砲ノ者ナド時トシテハ此負
様可ナルベシ又本文弓。鉄炮ヲ輪束ニカ
クルトアルモ相似タルヲナレド兼テ長
手拭ノ端ヲ袋ニ縫置モ面倒ナリ且ヘ鉄
砲ハ若モナク負ハルレド弓ハ甚釣合悪
敷コヽロヨカラズ木刀ナド持テ働キ試
ルニ本彌ヲ入タル端ノ袋縫ノ所。ハズル
ヽナリ得失試テ可知又此尺下文ニハ三
尺ニテ少シ短シト云ヒ前ニハ一尋半ニ

切ト云フ前後相齟齬ス是程ノフニ如此
ト云ハ一向埒モナキ次第也予信正ガ事
ニ随ヒ試ニ縫物尺ニテ六尺計モアラザ
レバ心能負事カタシ又予ガ云所ノ負様
モ此尺ニ同事ナリ何レ試テ宜キニ可任
者ナリ

軍配團扇采物は其人によりて持事也軍扇は小身の
士などの必用意する事とも聞へす余資あらは支度す
へし策はいにしへ騎崎士は必持たりと見へたり其法古書^キ
に往々に出中世より鞭を用る事はやらすて戦場に
用たる士も多からす是時勢也近世に置ては馬のり

馬法の師といへとも策を取て用る事まれなる故又
策をあつかふ叟極て不自由也犬追物の古式の如きは
策弓箭を皆具とせり按るに当時騎兵として策を
あつかふ事不自在なれば必此物を用すして叶はさると
あらず人々心に任て用意すへし大坪家傳にも策鐙
手綱に必馬を用る要具たれとも今の時勢に應て
用意心次第たかへきもの也或流に軍配采拝策を
三つのさしとて納所に説くをいへとも伝用しかたし
云家の傳に此如き事多し

一貫曰軍配團扇ハ古事記。古物語等二一

向見アタラズトイエ氏軍器考圖式太秦

廣隆寺藏上宮太子團扇ト云物出ラリサ
レバ此物上古ヨリ有シナラン又足利義
滿ノ頃ニハ軍中ニ用ル事。正ク見シト云
ンヤ三議一統法量門ノ条ニ軍陣ニテ座
中團。扇子ニ准ズベシ馬上ニテハ鞭ニ准
ズベキ也トアリ三儀一統ハ軍器考補注
ニ鹿苑殿ノ代ノ書ナ
ル赴見ヘタリ鹿苑院
ハ義滿將軍ノ御事也又鎌倉志ニ江嶋巖
本院宝物太田道灌ノ軍配團壹枚鍊物黒
塗ナリトアリ又近代ニ至テハ三河後風
土記ニ小幡氏軍配團ヲ制スル事見ユ北
越軍記ニ宇佐美駿河守定滿ガ軍配團扇

ノ事アリ武邊咄聞書ニモ軍配團扇見ヘ
タリサレバ近世ハ其人トシテハ此物ヲ
以テ軍ヲ指揮スル要具ナリ其製造種々
様々異種アリ予ガ考ヘ知タル所モ有ケ
レド余リ長文ニナル故ニ爰ニ不記又采^{さい}
擇ト云物予ハ短学ニテ古軍記。古物語ニ
所見ナリ武林原始ニ源賴義朱サイハイ
ヲ新羅三郎義光ヘ賜フトアレバ古代ヨ
リアルヲアキラカ也ト記セリ但シ軍器
考補註ニハ甲陽軍鑑ニ賴義朱サイハイ
ヲ新羅三郎義光ニ賜フ由見タルハ甚偽

也信用スルコトナカレト記サレシ何様
古書ニ不見^レナレバ上古ヨリ有ケル杯
云説ノ如キハ疑フベシ又近世ノ軍記太
閤記杯ニハ所々ニ見ヘタレバ近キ世ヨ
リハ此物ヲ以テ軍ニ令スル事明カナリ
碎玉話杯ニ
モ見ヘタリ又軍器要法ト云書二甲陽軍
鑑口訣ト云モノヲ引テ長尾謙信相州小
田原ヘ攻入二ノ丸蓮池マデ迫ツメ謙信
ト名乗テ朱ノ大再拝ヲ打振士卒ヲ下知
シテ引揚タルトアリ又信玄武瀧山ノ城
ヲ攻ラレシ時城主北条陸奥守矢倉ヨリ

磨ノ三尺バカリナル金ノ大再拝ヲ打振
テ下知セシト云フト記セリ又今當故實
者。軍法者流ノ傳授ナド、称シテ大事ト
スルニハ采^ツ拜五種ノ義或ハ三ノ采^ツ拜ノ
秘授或ハ其文字ニ傳アリ抔ト尊大ナル
事ノ様ニ作ス者アリ或ハ其家々ノ軍制
ニ依テ金。銀。朱。白。ヲ差別シテ諸將ノ次第
ヲ分別ニシナンド甚紛々トシテ六ヶ敷
事少シナラズ取捨考ヘナキ時ハ迷惑ア
ラン予モ徐林氏ヨリ習タル采幣ノ事故
實制作等アレト爰ニ洩シヌ但シ是等モ

皆近世好事ノ者ノ作意多シテ信用ナリ
カタキヲアリ又軍扇ト云物ハ軍器考圖
式ニ源義家ノ扇ナル物日月ノ画也又参
考保元物語ニ義朝兵共ノ中ニ打立紅ノ
扇ニ日ヲ出シタルヲ開キ使フ。平家物語_ニ
熊谷アレハ。イカニ。ヨキ大將軍トコソ見
マイラセテ候ヘ。マサナウモ。カタキニウ
シロヲ見セ給フ物カナ返サセ給ヘクト
扇ヲアゲテマ子キケレバ源平盛衰記ニ
ヒラ山馬ヨリトビヨリ。ハシゲタノ上ニ。
走ノボリ。ユンヅエヲツキ。アフギバラク

トツカフテ又義經皆紅ニ日イダシタル
アフギヲモツテ。ワシノヲニタビ。ユレニ
テ、キヲマ子キ。カウシヤウツカマツレ
太平記ニ皆紅ノ扇二月出シタルヲ矢ニ
挾テ遠的場タテニゾ立タリケルナド、
見ヘタリ今當ハ種々ノ制作傳授秘事ト
称スル者モアレド多分長一尺計太平骨
幅一寸一二分骨数ハ本計ニテ金銀ヲ。ダ
ビ日月ヲ出シタルモノナリ又世ニハ骨
ヲ銀鉄ニテ作タル扇アリ或ハ格別ニ大
キナル制モアレド皆利用ニ惡シ或ハ軍

扇ニハ至極ノ大傳アリト云者モアレト
信用シ^ガタキ事ノミナリ是又惑フベカラ
ズ又信正軍扇ハ小身ノ士ナド必用意ス
ル^レトモ聞ヘズトハ何ニ不聞事ゾヤ予
ハ短学ナレバ軍記物語等ニモ此差別ヲ
不知信正ハ何ニ據シ^レトニヤ又鞭ノ事ハ
万葉集ニ見ヘ又武林原始ニ江次第ヲ引
テ藤鞭[○]塗鞭ヲ出セリ又延喜式民部條ノ
鞭[○]左馬寮條鞭帛ヲ出セリ又今昔物語ニ
モ鞭ノ^レ見ユ又参考保元物語ニ義朝既
ニ鞍ニ手打カケ馬ニ乗ントセラレケル

ガ如何思ヒケン手ニ祓入タル鞭ヲ祓出
シテ車宿リニタテル平治物語ニ鞭ヲ以
テ信賴ノ弓手ノ頼サキヲシタ、カニ打
レケリ杯ト見ヘタリ其外軍記等ニ見ヘ
ス。飭抄。射御。三義一統。小笠原大双紙。大諸
礼。騎射秘抄。類聚流鏑馬。岡本記。ナドニハ
所々ニ見ヘタリ或ハ故實者。軍法者流。弓
術者流。馬術者流ノ傳授トスル所ノ鞭事
制作寸尺由來等種々様々ノ習アリ甚繁
多妄説スクナカラズ信用難成事而已多
カリ予ガ山孤氏。勝上氏。徐林氏ヨリ請シ

赴アレド其是非ヲ辨ゼンレ殊ニ煩シク
繁文ニナル故ニ爰ニ不記又本文策むちハイ
ニシヘ騎士ハ必持タリトアルヨリ以下
ノ文面予ハ合點参ラザル所アリ元來鞭
ト云物ハ騎馬要用ノ具ニシテ無テハ不
叶物ナレド後世ニ馬術ノ流義ト云物出
來テ大坪。八條。小笠原杯ニ託テ馬場乗ノ
事ヲ專務トシ只其馬ノ振合ノ美々敷足
並拍子ノ面白キヲ而已第一ニ穿鑿シテ
此事ニノミ堪能ナル者ヲ以テ馬術ノ上
手達者名人ト尊ム故ニ馬乗場ト云事ノ一

種ヲ以テ極則トスサレバ馬口勞ト云者
ハ價ノ貴トカラシ事ヲ貪ントスレバ其
事ニ而已間ニ合スル手段ヲ宗トシ牧ト
云モノモ古代ノ風俗トハ変テ馬ノ生長
モ別段ナランヲ疑ナシ彼馬場乗ヲ最初
ヨリ極長トシテ仕込タル馬トモ多カラ
ンナレバ古代ニ名馬ト称シタル物今世
名馬ナリト呼ベル物トハ名實異ナルベ
シ惣テ今當ノ馬場乗ト云物ハ幾返ト云
事モナク引廻テ墨曲尺ヲ打タル如ク乗
テ振合ノ壯觀ノミ第一トスル事風俗ナ

レバ甚キ人ハ筋ヲ切シメテ生モツカヌ
ト云ハ名聞虚躰ノ罪人言語ニタエタリ此類ニテモ可考意ニ鞭打ノ
沙汰ハ入又事ニ成テ自ラ鞭打ノ事ハ絶
枯シテ不案内ニ成タルハ自然ノ理ナラ
ン故ニ鞭打事常ナラズ鞭ハ大傳大事ア
リ忤ト尊称秘密スルヲニ成テ或ハ七本
鞭ノ秘授真。草。行ノ次第ト云ガ如ク其習
説多端ナレバ鞭術ノ實事ニハ疎クナレ
ルハ其筈ナリ又本文馬法ノ師トイヘ凡
策ヲ取テ用ル事稀ナル故ト云ル馬法ノ
師ハ多分彼馬場乗ノ上手ノ事ナレバ左

モ可有事也。又犬追物ニ策。弓。箭ヲ皆具ト
スル事勿論ナリ。何ゾ犬追物ノミニ限ラ
ンヤ。古代弓馬盛ンナリシ時ノ武士ハ策。
弓。箭ヲ皆具トスルヲ然リ故ニ犬追物ノ
事ヲ制作シタルニモ如是。近世弓馬ノ術
古代ニ一變シテ騎射ノ術衰ヘ漸々三騎
射ト称シテ其作法ト云ノミ是モ後人ノ
偽作少ナカラズ妄作類多シサレバ今當
ノ俗眼ニテ見時ハ犬追物ノ皆具モ珎シ
キ事ノ様ナレド其時代ニテハ何ノ珎キ
事トスベケンヤ可考。又當時騎兵トシテ

策ヲ扱フ事不自在ナレバト信正ノ云シ
ハ。ヤハリ當時行ル、所ノ馬術ヲ以テ了
簡シタルナラン何ゾ今トテモ實ニ騎兵
ノ肝用ニ至サバ鞭術ニ疎テ濟ベキヤ鞭
事ナクテハ不可叶。是其實。不實ノ差別ノ
ミサレバ騎兵トシテハ鞭必用ナリ今ノ
馬場乗バカリヲ以テ馬術ノ根本ゾト思
フ了簡ニテハ鞭術ノ本意ハ失ベシ熟味
了得スベシ又大坪家傳ニモ策。鐙。手綱ニ
必馬ヲ用ルト云フ予モ大坪流ヲ稽古シ
テ彼書ヲモ所持シタレト左様ノ事ハ未_タ

知但シ此大坪流ト云ニモ間ニハ後世ノ
雜入偽作多シ齊藤安藝守好玄ノ名ヲ書
載是ヲ流祖トシタル傳本多シ齊藤主税
ガ著述武馬必用系圖ノ条ヲ見ニ齊藤好
玄ハ元祖大坪廣秀ヨリ四代目也サレバ
此好玄ノ名ヲ書タルハ後作ノ證明ナリ
角大坪流ト称スルモノモ其新古疑ベキ
事多ケレバ大坪流ト而已アリテハ右ノ
文面合點参ラズ又或流ニト云ルヨリ以
下信正ノ言分得タリトスベシ

右の品々には必結を付事へ例也或流に結を輪に

むすひて鬼こふしに結ひかたくの鑕を長くして鎧の
胸の環にかため或は腰にとむるといへとも梅日に鎧上には
随身の具多ければこれらの物を身に固め置んは煩し
組討などの時も害有へし取落さんは心うけれとも又血戦
に損あるを思慮すへし然れば腰はさむをしくへからす

一貫曰是等ノ物ニ緒ヲ付ル事腕貫ト云
ナリ結様品々アレド如本文片々ノ端ヲ
長クシテ叶結ト云物ニスルヲ通例也本
文ノ鬼コブシト云結予ハ不知也又鎧ノ
胸ノ環ニカタメ或ハ腰ニトムルトイヘ
氏按ルニ鎧上ニハ隨身ノ具多ケレバコ

云
云

レヲノ物ヲ身ニ固メ置ンハ煩シ組討ナ
ドノ時モ害有ベシ取落サンハ心ウケレ
ドモ又血戦ニ損アルヲ思慮スベシトハ
一應聞ヘザルニアラズ乍去然レバ腰バ
サムニ如ベカラズト有文言予ハ合点参
ラズ信正ガ身ト云シ所ハ何レゾヤ鎧ノ
胸ノ環ニト云ヨリ以下ノ文面ヲ可考一
条ノ中ニ如此文言ト云ハ埒モナキ事也
惣テ是等ノ類得失ナド論ズルハ小利口
ナレド無益ナリ何事モ得失一双セサラ
ズト云フナシ只自己ノ覺悟次第ニテ乳

首ノ鑲ニナリ吒腰ニナリ吒止ムベキ時
宜アラン今當流義ト云モノヲ立テ傳授
ヲヒケラカス族カヽル鎖細ノ事ヲ六ケ

敷云ヘルハ久キ者也驚ツナカレ

多賀豊後守高忠の弓書を按るに犬追物の策は託ワビ

てぬき入よと有りひてとはよふくにさし入る也戰場
の策は腕にかくましきよしあれば策采物の緒を身
に固めん豈好むましき事也時勢を考時宣を格悟
する事兵家の權機ハタテキなるへし

一貫曰予ハ短学ニテ多賀豊後守高忠ノ

弓書ト云物未見ニ及高忠聞書別記ト云書

ハ所持シタレド其書ニハ左様ノヲナシ
又戰場ノ策ハ腕ニカクマジキヨシアレ
バトハ何ニ左様ノ事アリヤ又例ノ無證
拠ニテ難分ナリ何様是等ノ事定リタル
モノニハ非ズ古代ハ鞭差ト云ル者ヲ召
具シテ鞭ヲ持セシ時モアリ則参考平治
物語ナドニ見ユ又参考保元物語ニ義朝
既ニ鞍ニ手打カケ馬ニ乗ントセラレケ
ルガ如何思ヒケン手ニ拔入タル鞭ヲ拔
出シテ車宿リニ。タテル又参考太平記ニ
嶋津

前安藝
司

素ヨリ物習タル馬上ノ達者矢

繼ハヤノ手キ、ナレバ少モ騷カズ田中

藤九郎
盛兼

進テ懸レバ。アイノ鞭ヲ打テ推モ

ジリニハタト射ルトアリ是等ニテ古代

ノ武士ノ時トシテハ鞭ヲ腕ニツラヌキ

持タル赴ヲ可知本文ノ赴余リニ頑ナル

ヲナリ惣テ古今合戦ノ時変又臨時其軍

制ノ変化ニテ或ハ騎ヲ用或ハ歩ヲ以テ

スルヲ古今合戦ノ術ナリ但シ騎歩凡ニ

先後本末ニスルヲハ古今ノ風俗ニ差別

アリサレバ今トテモ騎ヲ可用時節アラ

ンニハ鞭必用ナリ又馬上ニ可持用具ノ

趣ニテ鞭ノオサメ様定ルベカラズ其時
ハ自己ノ勝手次第便宜タルベキニヤ決
テ腕ニハ懸ベカラズ_ト腰ニ止ルトモ留
ヌトモ佩楯ニ藏ムベカラズ_ト何トモ治
定スベキ事ニ非ズ是臨機應変ナリ騎馬
ニハ鞭[○]必用ナリト云ハ馬術ノ要具ナレ
バナリ其實事了簡アルベシ如_二本文疑附
タル_一ニハアラズ又本文前ニハ腰ハサ
ムニ如ベカラズト云ヒ爰ニハ身ニ固メ
ン_一_二夏_一奸ムマシキ事也トハ又相齟齬ス何
ノ_一ゾヤ但シ時勢ヲ考時宜ヲ格悟スル

事兵家ノ権機ナルベシトハ得タリトス
ベシ此心得ヲ以テセバ軍配團。再拝扇子
ノ類ヲモ藏ムベキ事ハイカヤウニテモ

ヨロシ

射術の士は弓かけ留弦箬刺打脇に其外所と身に添
る弓器あり小筒大筒をかゝへ放に打士もまた玉藥
入隔皮父母の火繩なと云要具あり皆其術者の沙汰
なれは今之にのせす

一貫曰弓懸ト云物武林原始ニ江次第ヲ

引テ弓懸ノ事ヲ出セリ又禮家ノ古書

三議

一統。小笠原大
双紙。射御ノ類
二見ヘタリ或ハ高忠聞書

軍器考補
注ニ引也

類聚流鏑馬。杯ニハ手袋氏云リ

又明德記。三河物語ノ戰記ニモ見鏑ヘタリ

但シ此物古今ノ差別アリ近世ニハ右バ

カリニサク弓懸出來テ或ハ的鏑。指矢鏑。

杯ト云テ三ツザシ。四ツザシ。堅メ帽子。角

入帽子。ノ制アリ是古代ニハ射事一変セ

シ故ナリサレバ古代ノ鏑ハ一具懸或ハ

双鏑ナド称ス是氏鏑有ニ對スル号ナリ

彼氏双鏑ニハ緒留ノ大事ト云アリテ三ヶ

ノ秘傳トテ故實者。軍家者流。射家者流。ノ

大傳トスル所ナリ武器普録口傳誌ヲ見

ルニ甲陽軍鑑ヲ引テ元龜三^壬申年十二

月廿二日遠州見方^ケ原御合戰ノ時石河伯

耆守ヲクレバセニ着陣シテ土岐家ノ舊

士淺岡某ト云者ニ向テ此度ハ信玄公ト

軍アリテ討死任タル時武道穿鑿強キ敵

ニテ尸^{しかばね}ノ上迄見ラレンズルニ軍陣ノ鞞

ノ緒留ハ如何スルゾト問テ習ケル也

ト記アリ可考惣テ射藝古代ニハ変シテ

弓具モ異ナル物出來タレバ今俗ノ弓箭

トハアワヌ事多シ間ニハ。タ、今日ノ見

物名聞ノ為ニ間ニ合ヒ事ノミ宗トスル

射者モ有ケレバ其修練スル所古代ニ異
ナル多シ又正直ノ射ヲ務ル者トテモ弓
具ハ今様ニ可用品アリサレバ今戰場ニ
可用トテモヤハリ馴得シタル今様ノ礮
ヲ可用時モ有ナンナマナカ故實ナドニ
流テ仕モ馴ヌ物ヲ用テ不覺不可有タ、
く取捨其時宣アルベシ思慮スベシ此所
眞實ニ取分修行稽古セバ本來正實ノ射
術ト邪理ノ射術トノ差別分明ニ知ラル
ベシ熟味可有又替弦ハ勿論用意專ナリ
既ニ軍防令曰每人弓一張弓弦袋一口副

弦二條トアリ其外東鑑。平家物語。源平盛
衰記。太平記。杯ニ弦袋ノ事見ヘ古画ニモ
弦袋付タル躰多ク見ユ此物多アレト其
一證ヲ舉ルニ土
佐光信ガ一ノ谷合戦ノ画ニ悉ク見ヘ此
タリ光信ハ後花園院時ト伊勢氏説也此
弦袋ハ即チ副弦藏ムベキ料ニ持用スル物
ナレバ今世トテモ射ヲナサン者ハ必ズ
替弦ヲ用意スベキ肝要也又筈刺ト云
物予ハ知ラヌ物ナレド按二世ニ弭鑓ト
云モノ有テ其制袋鑓ト云物ノ如キナリ
是ヲ用意シテ弓弭ニ刺テ間近キ敵ヲ撞
ベキ。タクミトス如此弭ニリシイル、物

ナレバ箬刺トハ弭鑕ノ事ナラン素ヨリ
古代ニハ聞モ及ヌモノナリ是近世射術
ノ流義ト云モノニ好事ノ者工夫シテ附
會タル事ナラン欵射恣一統日置流弓目
録ノ条下ニ弓ヲ鑕ニ用ルトハ袋鑕ヲ懷
中シテ矢ダ子射ツクシタラン時右ノ鑕
ヲユハヅニサシテ用ルトアリ此文實ヲ
失ヒタル
所アリ
可考又雜兵物語弓足輕小頭ノ条ニ弓
ノ勝負ガ初ラナイ先カラ弓ニ弭鑕ヲヒ
ツク、リ付テ畧扱弭鑕ヲ以テ頬力下散
ノハヅレカ透間ヲ子ラツテ突サレイト

見ヘタリ右ニ書ハ一向乍去古書ハ云ニ

不及近代ノ戰記等ニモ曾テ不見當者也

参考平治物語待賢門軍ノ条ニ鎌田堀川
ヲ馳越テ重盛ニ組ント落合重盛近附テ
ハ叶ハジトヤ思ハレケン弓ノ筈ニテ鎌
田ガ兜鉢ヲ丁ト撞。々レテユラユル間ニ
トアリ此時彼、筈刺ト力弭鎗トカ云物ア
ラバ鎌田遁ルベカラズ残念ト云ベシ惣
テ近キ世如此コタツニテ工夫シタル事
多シテ幼学ヲ誑ズナリ弓ノ弭ニ鎗ノ身
ヲ付テ持テ見バイカニ頑愚ノ者トテモ

合點ユクベシ是而已ニ不限人ヲ惑ス事
スクナカラズ能々思慮アルベシ又打根
ト云物モ近キ世ノ射家者流ノ傳授トス
ル所也逸見ノ書ニハ檉（柳）木長サ七寸五分
ノ柄ニ五寸三分桺葉形ノ鎗ノ刃ノ如キ
ヲスゲ。七尺五寸ノ打緒ヲ腕貫ニ付ル又
雲霞集軍器考補
注ニ引也武射必用。射法一統ナド
ニモ見ヘテ其制異ナルモ有ケレド爰ニ
ハ漏シ又何様是等ノ物ハ近世ノ俗用ナ
ルベシ古軍記。古物語。近世ノ軍談ニモ予
ハ短学ニテ不見ニ當信用ナリガタキ事也

又逸見ノ書ニハ手語ニ及テ二ノ矢引ベ
キ間ナキ時内胃ニ打込トアリ利口ナル
説ナリ是ハ参考太平記神樂岡合戦ノ条
ニ因幡豎者全村畧 篋ノ太サハ尋常ノ人
ノ墓目カラニスル程ナル三年竹ヲモギ
ツケニ推削テ長舩打ノ鏝ノ五分程鑿ナ
ルヲ箒本込ナカゴヲ打通シニシテ子デ
スゲ沓卷ノ上ヲ琴絲ヲ以テ子タマキニ
卷テ三十六差タルヲ森ノ如クニ負ヒナ
シ態ト弓ヲバ持ズ是ハ手撞ニセンガ為
也ケリ畧 上差一筋拔出テ櫓ノ小間ヲ手

突ニゾ突タリケル此矢誤ズ矢間ノ陰ニ
立タリケル鎧武者ノセندانノ板ヨリ
後ノ総角付ノ金物マデ裏表二重通テ矢
先二寸斗出タリケルト見ヘタリサレバ
是等ノ事ニ據テ後人工夫ヲ仕出タル者
ナラン欵全村ガ手撞ニシタルヲ以テ打
根ト云物ヲ作爲シ敵ノ内兜ニ打込ン杯
浮雲事也急度思慮シタル上ナラデハ持
用難成カラン或今俗何流ノ劔術ノ祖人
ノ仕合シテ打勝タル仕様ハ如此ト其事
術末流ニ殘リテ大事秘傳トシ此術何人

ガ取タリレ氏勝利ヲ得ラル、モノゾト思
フニ等シ愚ノ至リ可笑く又本文ニ其外
品々身ニ添ル弓器アリトイヘト弓器ト
云ヘル物モ取捨ナクテハ不叶事也軍中
ハ兎角シテ省畧ヲ專トスベケレバ肝要
ノ外ニ無益ノ器ヲ不可持又砲術ノ器物
モ品々アレド是モ必用ノ外無益ノ道具
不可嗜予モ佐久間貞久井奈留流砲術ニ砲術ノ
事ヲ聞シニ種々イ習アリ又愚按ノ事モ
アレド甚繁矢ニナレバ不贅此鉄砲ト云
物甚以テ重宝言語ニ不及但シ一得一矢

ノ備ル所必然ノ理ナリ是ヲ主ル人心得
ナクテハ不叶事也。タトエバ女童ヲシテ
火ヲサ、シムル氏鎮西八郎ノ弓精ヲモ
アザムクベキナレド只一滴ノ水零火皿ヒザラ
ニ交ル時ハ三尺ノ棒ニモヲトレリサレ
バ心ヲ用ズンバ有ベカラス此餘損失ノ
大事アレド可恐ハ雨露ニスキズ末鍊ノ
砲術者難得所ナラン既ニ信長記長嶋合
戦ノ条ニ一揆ノ奴原道ノ悪キヲ幸トヤ
思ヒケン長嶋ヨリ究竟ノ射手共三千計
差出ヒタト。ツイテ指ツメ引詰散々ニ射

ケルニ味方ノ鉄炮ハ雨ニ遇テ用ニモ立
ズ敵ハ皆歩立ナレバ岨そでガケ共云ズ走り
廻ル大勢ノ引立タル癖ニテ踏止リ追拂
ベキヤウ更ニナシト記アリ能々思惟有

ベシ

信正按るに鎧皆具は勿論其上に隨身の品々た
し其流とも又多鑲也といへとも大むね事煩しからず
手軽く便利なるを人々の處用とすへし予か聞所の
二三を記して同志の士に忠とすよろしきか中に
も可なるを自悟あらは幸と云まし仍て十三条を
挙て糧とす

一貫曰信正此条深切ナリ乍去此十三条
ト云ル中ニハ煩シト思ル、アリ殊ニ糲
袋ヲ腹ノ内ニ四隅ヲ釣ト云ガ如キハ至
テ煩キ事ニテ難信サレバ此所ニ大ム子
事煩シカラズ手輕便利ナルヲト云ヘル
文面トハ相齟齬ス何ト云事ゾヤ此各条
ノ愚評ト並べ可考

鎧註文の吟味

凡六具を造るには先註文の上の損益を吟味し其念を
入て宜しき物とされ念を入ましき物とを考て註文
有へし此註文に不案内の書立あれば函工其好手の不

煉なるをさして必粗末を被事毎度これ有事也或は
注文を具足屋に打任するも必意此度不煉なる
故容易に書立るなるへしたとへは魚物野菜の品々を
精しく不知して料理の献立を書にひとし六具の

糸物かな物革包うるし塗の所も其物とに依て

用捨の品々あれば士家心をひそめて注文の上の實
理をしり得へきもの也或は主將の鎧は本小相の古制の
鎧を用ひ大袖大たてあけを着用有事と心得夫に
次てす家長大身の應しも古の鎧に近き様に注文
物すきするもまゝなり時勢に暗しといふまし
又古制の大満仲しころ大吹返しは徳ありて今時も

用へきものなる近制の日根野しころ小耳の吹返を
宜しとする数利害の吟味精しからすこれらの大
指は註文を整るよりして其實理に入て吟味なるへき
もの也六具ものの可盃損益号の各条の下に互
見し味へし予か吟味の註文は洛の函上岩井七郎兵衛
数度制して心得ぬれは渠カレに因て制作は精義有へし

一貫曰如本文此事吟味ナクテハ不叶事
ナリ此赴得タリトスベシ又今當大身歴
々ノ甲冑ヲ見ルニ多ハ信正ノ云ゴトク
時勢ニ暗キ制作多シ且へ鎧ト称スル物
ニモ非ズ腹巻ニモ胴丸ニモ非ズ彼是混

雜似タリノ具而已多シ縦ヒ時勢ニハ暗
ク[○]氏セメテ正キ製造ノ物具ナラバ據ア
リ氏云ン歟何レ紛々タル甲冑ヲ好ムト
云ハ其人ノ志ノ程モ思計ラル、^一也考
ヘ有ベシ但シ角イエバトテ其物ニ凝附
琴柱ニ謬スベシトニハ非ズ餘リニ其程
ヲ失タル制作少カラザルニ依テノ義也
既ニ近世ノ軍記ニ大身ノ人々モカノ鎧
ト称スル物ヲ真似タル甲冑ヲ着セシト
ハ見ヘズ甚畧輕異類ノ物多シ其證ヲ挙
ルニ遑アラズトイエ氏武邊咄聞書ヲ見

二浦野若狹守ガ小水手ノ甲當世具足也

トハアリ原隱岐守ガ十王頭。日根野織部ガ

唐冠同書ニ備中黒田長政ガ大水手同書

アリト福嶋正則ガ四段鹿ノ角同書ニ四本

多中書ガ忠信ガ甲同書ニ中務之秀吉公

ノ八日ノ月。蒲生氏卿ガ鯁尾。伏木久内ガ

割蛤。細川三斎ガ山鳥同書ニ山鳥武田信

玄ノ諏訪法性。竹中半兵衛ガ一ノ谷。一貫

ニ公議ノ御甲ヲアレモ除之ノ柴田伊賀守ガ鉄蓋ヶ嶺。

同書ニ鉄枴峯ニ作ル明知左馬助ガ二ノ谷。矢田作

十郎ガ鯉ノ甲。加藤清正ノ長烏帽子。同書

ニ肥

後守ト
アリ
藤堂新七ガ帽子
同書ニ此外ニ門奈左近右衛門ノ

俵ノ皮投頭
ト記セリ是等ノ赴ニテモ可
巾トアリ

考知ナリ。サレバ今當ハ近世戰國ノ具

足ニ少モ不變バ。タトヒ大身ノ人タリ

古代ノ鎧杯ト称スル甲冑ハ時宜ニ非ズ

必ズ彼趣ニ據リ取捨了簡ノ可有所ナラ

ン又本文ニ古制ノ大滿仲シコロ大吹返

ハ徳
一貫云徳ノ宇本ノ儘ニ
アリテ今時

モ用ベキモノナルヲ近世ノ日根野シコ

ロ小耳ノ吹返ヲ宜シトスル類利害ノ吟

味精シカラズトハ予ハ合點参ラズ大滿

仲鋤。大吹返ナド何ノ利用ニ宜ク時勢ニ
モ應ジタル物ニテ如是ニ云ケルニヤ又
日根野鋤小耳ノ吹返ハ何故ニ利用ニア
シキヤ何ノ損失アルヤ一向其差別證據
ヲ爰ニ不記バ不埒ナリタゞ徳アリテト
計有テハ信正ガ獨合点ト云者ニテ是又
凡例ニ云シ赴ハ失念ト見ユ且へ上卷ニ
必シモ上代ノ鎧ノ制ニ泥ムベカラズ抔
云ナカラ爰ニ古制ノ大滿仲鋤。大吹返ヲ
徳アリトハ前後相齟齬ス是等ニテモ信
正ガ云帶甲ノ櫛徑ト云モ、ナルヤ如何

信正著具の事に來往して數師に記聞する所

自悟する所專時勢を^{ハマリ}しんさくして用拾の分あ

り今諸流をも取捨し古法新制をも扣ましへて

當時帶甲の捷徑のみを此本に記す故實本^{チカミチ}抛

利害の論は帶甲讀編に弁すもし新るゝ日あら

はかれに見るへし此書小冊にして初学の寒士も求

得て小益ならんをこひねかふものなり

一貫曰此条聞へタリ乍去古法新制ヲモ

相マジエテトアレド前卷ニ必ズシモ上

代ノ鎧ニ泥ムベカラズトアル如何又當

時帶甲ノ捷徑ノミヲ此書ニ記ストアレ

ト是モ前章差物獨拔刺或ハ臨戰脛楯ノ
着用或ハ平脉三四十通ノ速着ナドノ類
ニテハ決テ楗徑ト云ベカラズ或ハ凡例
ニハ本據ヲ正シ自ノ考ヲモ加ヘテト云
又其淵底ヲ。クラマス師モアリ本據モナ
キヲバコ、ニ省クト云然ニ此所ニハ故
實本據利害ノ論ハ帶甲續編ニ辨ズト云
或ハ盛衰記ノ条目又其文躰ヲモ取違或
ハ画古今ノ制儀伏兵伏ノ式ノ条ニ己ガ
見モセザル延喜式ヲ見タルガ如ク書ナ
シタル類。其外前後齟齬乱脱混雜ナルヲ

少シナラズ悉ク是ヲ挙ルニ煩シケレバ
各条ノ赴予ガ愚評スル所ト互見シテ辨
フベシ何程信正着具ノ事ニ來往シテ數
師ニ記聞スル所自悟スル所專時勢ヲシ
ンサクシテ杯ト書タリ_レ迂遠妄說無稽
無證據ナル_レハ其通ナリ能々可考也

寛保二壬戌八月吉日 小寺三郎兵衛述

一貫曰寛保二戌年ヨリ予ガ此愚評ヲス
ル寛政寅年迄ハ五十三年ニナル又信正
ハ出羽州莊内住トアルニ依テ寛政武鑑
ヲ見ルニ莊内ヲ領知シタマウヲ不見當

羽州田川郡庄内鶴岡ヲ領知シタマウハ
酒井左衛門尉忠徳候也寛政武鑑シヤウナイ
サウナイ相似タレバ同所ノヲテハ有
ザラン坎又莊内ト云所アリテ其住所ナ
ランニハ浪人ナルベキ坎猶尋ヌベシ

此呉練の發端は建部能致帶甲通上下
を懷にし來へ彼の書の信疑正邪を予に
談話せり能致は予かもとに星霜して
武器故實出よひ弓槍劒の術なんと稽古
修行するの朋友たりされは論語に終日
不違如愚と見へし吾か呉意を諸々惑べき
交にもあらざれば初めは其論辨を彼書の
頭に書入亦其言の餘れるを以て旁に書
しに文面混雜し或は餘り或は遇へあた
かも反古の如し能致信正か一条をあゑて
予か愚評の一条をならへ次ん事をてふ是

偏に見くるしきが故也仍て是に應し
て許々の草稿なれり索より予か短学
管見なるを以て愚評せしものなるはおろ
かましく校正清書せんも片腹いたき
事なれば此儘にさし置ぬ尚此事
に精しからむ人を取て教育を待んと
おもふ而已又然りし得印本惣帶甲通
を得て彼能致が写本と互見せし也
或文字の違ひ或仮名惣法かい或写し
轉せし事などあれど其大宗に違ふ
事なるのば不及持し写本にかけて愚

評するものなり

寛政六^申 寅 歲十二月十日

大野又兵衛一貫述

此書其能事大野一貫先生之著述

恩顧し至許予写之豈可不秘乎

文化十^癸 酉 歲青陽仲浣

遠藤平作思忠